

大 阪 府 茨 木 市

平成18年度発掘調査概報

平 成 1 9 年 3 月



茨 木 市 教 育 委 員 会



東奈良遺跡(HN06-2)出土 儀杖形木製品



東奈良遺跡(HN06-2)SD-01出土 破鏡(方規格炬鏡)



茨木遺跡(IK06-1) 第3面流路(SR-01)内建具出土状況(北西)から



茨木遺跡(IK06-1) 第3面流路(SR-01)内おさ欄間出土状況(南)から



茨木遺跡(IK06-1) 第3面流路(SR-01)出土おさ欄間水洗状況

はじめに

わたくしたちのまち茨木という地名の由来についてや、茨木童子のことについて尋ねられることは、よくあることです。その土地に生まれ育ち、「いま」を生きるということは、必然にその土地の由来やいわれについて知りたくなるものだと思われます。また、牟礼遺跡の牟礼などの地名についても他の地域にもたくさんあり、何らかの関わりがあったのだろうと考えられます。

縄文時代から弥生時代、古墳時代、飛鳥・奈良時代を経て一体どのような歴史事実がこの土地に刻まれていったのか、様々なキーワードが思い浮かびます。銅鐸の鋳型、小銅鐸、太田茶臼山古墳、阿武山古墳、新屋神社、溝昨神社、茨木城などなど、古代から近世を考える上で人びとの営んできた暮らしの形跡が沢山残され、他の地域からの人の移動や他の集団とのせめぎ合いなどが想定されるとともに、未だその明確な解明がなされないまま現代にいたってきている部分もあります。

茨木市と高槻市との間にある阿武山古墳を北方に近くのぞむような西安威の丘は、將軍山とか大織冠山とか呼ばれ、そこに將軍塚古墳や大織冠神社があり、藤原鎌足とのかかわりが伝えられています。また、本市には春日神社も多く、中央とも深いかかわりがあった土地であることがわかります。

歴史の推移にかかわる文化財が多く残され、他の地域とのかかわりも解明されつつあるとともに、埋蔵文化財に関しても、開発事業に伴う発掘調査により、多くの遺物が出土しております、古代から近世の歴史を考えるうえでこれらの貴重な遺物を残し継承していくことは、大切なことと考えています。

この冊子は、平成18年度に行った発掘調査についてその概略について述べたものです。調査にあたって、惜しみのないご協力をいただきましたご関係の皆様に深く感謝するとともに、今後とも本市の埋蔵文化財の保存・保護により一層の温かいご理解とお力添えを賜りますようお願い申しあげます。

平成19年3月31日

茨木市教育委員会
教育長 大橋忠雄

目 次

はじめに

例 言

茨木市内遺跡分布図

平成18年度埋蔵文化財発掘調査一覧表

1. 中条小学校遺跡（新中条町55-4）（株）日本エスコン	1
2. 穂積庵寺跡（上穂積二・三丁目地内）上穂積西上地区画整理組合	31
3. 茨木遺跡（本町1398-4）（株）小阪工務店	37
4. 中条小学校遺跡（駅前一丁目310-4他）（株）食通	64
5. 東奈良遺跡（東奈良二丁目36-8）新星和不動産（株）	68
6. 中条小学校遺跡（下中条町62-2）豊田通商（株）	72
7. 東奈良遺跡（東奈良三丁目384-1他）浅川宏志	76
8. 茨木遺跡（大手町804-1・804-4）三和住宅（株）	97

例

言

1. この概報は、茨木市教育委員会が平成18年度に実施した発掘調査事業報告です。
2. 本書に使用した地図は「茨木市地域計画図一1／2,500」です。

平成18年度 埋蔵文化財発掘調査事業の概要

1. 平成18年度発掘調査事業

茨木市における平成18年度の発掘件数は11件で、埋蔵文化財確認試掘・立会調査件数は169件ありました。発掘調査原因は、すべてが民間事業で公共事業ではなく、殆どが共同住宅建設工事でした。

発掘調査件数は前年とほぼ同数で、確認試掘・立会調査件数もほぼ同数です。社員寮の建て替えや民間企業の土地の売却が進み、駐車場として利用されていた土地の高度利用が図られ、また、交通の利便性や公共施設の充実等からか大規模な共同住宅の開発が顕著にみられ、北部丘陵の彩都も入居が始まり、建設があちこちで行われるようになってきました。

2. 平成18年度発掘調査における主要な調査の概要

平成18年度において茨木市教育委員会が実施した発掘調査のなかで、特徴のある調査は茨木遺跡の調査があげられます。

茨木遺跡の発掘調査としては、4例目となるもので、3例目の平成13年の調査では部分的ではありますが、瓦製水管列や上水道として使用された竹樋が確認され、近世前半の軒丸瓦・軒平瓦が出土しています。

本年度の調査地は、平成12年度の調査地より北北東約200mの地点で、より茨木城のあったとされる所に近い場所であります。造構面4面が確認され、古墳時代中期の上師器高环脚を伴う溝を有する面、および13世紀頃の瓦器焼を伴う室町時代の建物跡を中心とする集落跡、室町時代の集落造構を壊して北東～南西方向にのびる流路を中心とした造構群、流路埋没後に構築された水路や竪穴・土坑・溝・柱穴等の造構群、路面幅約8mの両側に石列を有する東西道路遺構？等が検出されました。

今の段階では、茨木城に直接かかわる造構とは断定できず、より慎重に検討する必要があると判断されますが、木製品・建築部材・建具・瓦等遺物がコンテナに67箱も出土していることから、近世に茨木城が廢城となった跡、町家となつていった形跡や濃厚な生活跡がみられ貴重な調査となりました。

用語等

S B : 建物跡・掘立柱建物跡

S E : 井戸

S X : 落込み・不定形土塁

S C : 柱列群

S K : 土塁

S D : 溝・雨落溝

S R : 流路

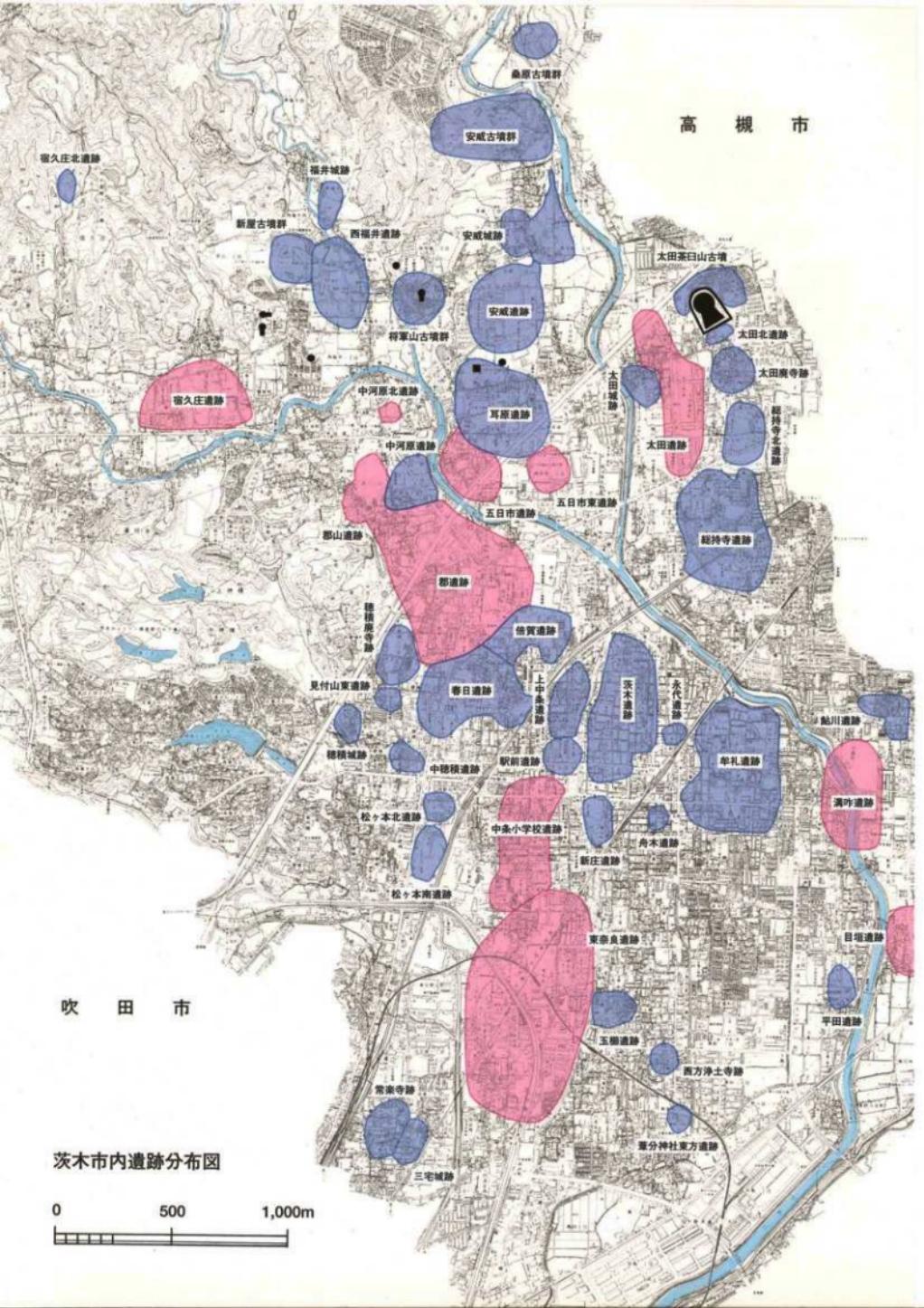
畿内第I・II・III・IV・V様式：畿内から出土する弥生土器を基準とした土器区分で、機種構成やプロポーション（土器の形態）で、およそ5つに分けられI様式が弥生時代前期、II～IV様式が弥生時代中期、V様式が弥生時代後期の年代観が与えられている。

庄内式併行期：豊中市庄内遺跡から出土した土器を基準とした時代区分で、およそ弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にあたる。

図版目次

第1図	中条小学校遺跡周辺既往調査区全体図	P. 3	第35図	茨木遺跡出土遺物(3)	P. 50
第2図	〃 調査区全体図	P. 5	第36図	〃 出土遺物(4)	P. 51
第3図	〃 調査区断面図	P. 7	第37図	〃 出土遺物(5)	P. 52
第4図	〃 古墳1 平・断面図	P. 9	第38図	〃 出土遺物(6)	P. 53
第5図	〃 建物1・2 平・断面図	P. 10	第39図	〃 出土遺物(7)	P. 54
第6図	〃 建物3・柱列平・断面図	P. 12	第40図	〃 出土遺物(8)	P. 55
第7図	〃 建物4 平・断面図	P. 13	第41図	〃 出土遺物(9)	P. 56
第8図	〃 出土遺物(1)	P. 15	第42図	〃 発掘写真(1)	P. 59
第9図	〃 古墳1 出土遺物(2)	P. 16	第43図	〃 発掘写真(2)	P. 60
第10図	〃 古墳1 出土遺物(3)	P. 17	第44図	〃 発掘写真(3)	P. 61
第11図	〃 出土遺物(4)	P. 18	第45図	〃 発掘写真(4)	P. 62
第12図	〃 出土遺物(5)	P. 19	第46図	〃 発掘写真(5)	P. 63
第13図	〃 出土遺物(6)	P. 20	第47図	中条小学校遺跡遺構平面図	P. 66
第14図	〃 出土遺物(7)	P. 21	第48図	〃 遺構面完掘状況写真	P. 67
第15図	〃 出土遺物(8)	P. 22	第49図	東奈良遺跡遺構平面図	P. 70
第16図	〃 出土遺物(9)	P. 23	第50図	〃 完掘状況写真	P. 71
第17図	〃 出土遺物(10)	P. 24	第51図	中条小学校遺跡遺構平・断面図	P. 74
第18図	〃 発掘写真(1)	P. 26	第52図	〃 遺構面完掘状況写真	P. 75
第19図	〃 発掘写真(2)	P. 27	第53図	東奈良遺跡周辺調査区概略図	P. 79
第20図	〃 発掘写真(3)	P. 28	第54図	〃 第1面調査区平面図	P. 81
第21図	〃 発掘写真(4)	P. 29	第55図	〃 第2面調査区平面図	P. 82
第22図	〃 発掘写真(5)	P. 30	第56図	〃 調査区周壁断面図	P. 83
第23図	德積庵寺跡調査位置図	P. 33	第57図	〃 出土遺物(1)	P. 86
第24図	〃 調査区全体図	P. 33	第58図	〃 出土遺物(2)	P. 87
第25図	〃 発掘写真(1)	P. 34	第59図	〃 出土遺物(3)	P. 88
第26図	〃 発掘写真(2)	P. 35	第60図	〃 出土遺物(4)	P. 89
第27図	〃 発掘写真(3)	P. 36	第61図	〃 出土遺物(5)	P. 90
第28図	茨木遺跡第1面調査区全体図	P. 39	第62図	〃 出土遺物(6)	P. 91
第29図	〃 第2面調査区全体図	P. 41	第63図	〃 出土遺物(7)	P. 92
第30図	〃 第3面調査区全体図・流路断面図	P. 44	第64図	〃 発掘写真(1)	P. 95
第31図	〃 第3面流路内建具出土状況図	P. 45	第65図	〃 遺物写真(2)	P. 96
第32図	調査区断面図	P. 46	第66図	茨木遺跡第1・2面遺構平面図	P. 99
第33図	〃 出土遺物(1)	P. 48	第67図	〃 第3面平面図/調査区断面図	P. 100
第34図	〃 出土遺物(2)	P. 49	第68図	〃 第1～3面検出状況写真	P. 101

高槻市



茨木市内遺跡分布図

0 500 1,000m

平成18年度 埋蔵文化財発掘調査 一覧表

No.	遺跡名	調査位置	調査期間	調査面積	調査内容	調査原因
1	中条小学校遺跡	新中条町55-4	18. 1. 5~18. 2. 4	845 m ²	弥生時代 古墳時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 中世 古墳(方墳)建物群 井戸 上塙 石器 土師器 須恵器 陶磁器	共同住宅建設
2	秘積庵寺跡	上穂積二丁目・三丁目地内	18. 1. 5~18. 3. 31	1,444 m ²	飛鳥時代(白鳳) 上塙 土師器 須恵器 軒丸瓦片	土地区画整理事業
3	茨木遺跡	本町1398-4	18. 5. 1~18. 5. 31	268 m ²	古墳時代 中世 近世 溝 塚穴 道路遺構 土師器 須恵器 陶磁器 金屬器 建築資材 建具 瓦	共同住宅建設
4	中条小学校遺跡	駅前一丁目310-4・310-18・310-19	18. 5. 1~18. 5. 19	147 m ²	中世 ピット状遺構 上塙 土塁群 小動物足跡遺構 土師器 陶磁器	店舗付共同住宅
5	東奈良遺跡	東奈良二丁目130・131	18. 6. 19~18. 8. 7	473 m ²	弥生時代 古墳時代 袋状土塙 溝 弥生土器 土師器	共同住宅建設
6	中条小学校遺跡	下中条町62-2	18. 7. 13~18. 8. 26	349 m ²	弥生時代 古墳時代 中世 平安時代 柱穴 溝 土塙 井戸 円形周溝 突穴性起跡 弥生土器 土師器 須恵器	共同住宅建設
7	東奈良遺跡	東奈良三丁目384-1・371-1	18. 7. 10~18. 8. 30	250 m ²	弥生時代 古墳時代 中世 弥生時代前期~中期前葉の 集落遺構(柱穴・土塙・溝) 弥生時代後期の大溝 古墳時代初頭~古代の溝 弥生土器 上師器 須恵器 金銀器 鐵杖型木製品 方格状鉢鏡(破鏡) 銅鏡	共同住宅建設
8	茨木遺跡	大手町804-1・804-4	18. 9. 28~18. 10. 20	199 m ²	飛鳥時代 奈良時代 平安 中世 近世 衝溝 ピット状遺構 住穴 溝 井戸 小動物(有蹄類) の足跡遺構 土師器 須恵器 陶磁器 瓦 下駄	共同住宅建設
9	郡遺跡	上穂積四丁目1-37	18. 12. 13~19. 1. 18	498 m ²	発掘調査終了	共同住宅建設
10	宿久庄遺跡	豊原町124 他	18. 12. 18~19. 2. 1	600 m ²	発掘調査終了	共同住宅建設
11	東奈良遺跡	若草町120	19. 1. 9~19. 3. 31	1,033 m ²	発掘調査終了	共同住宅建設
12	總持寺遺跡	總持寺一丁目380-3 他	19. 1. 16~19. 2. 9	203 m ²	発掘調査終了	共同住宅建設

No. 9~12についての報告は後日とします。

中条小学校遺跡

所在地 茨木市新中条町55-4

調査原因 共同住宅新築

調査期間 平成18年1月5日～平成18年2月4日

調査面積 845m²

調査担当 黒須 靖之

調査結果 中条小学校遺跡は昭和51年度に中条小学校改築に伴って発見された遺跡で、早くから市街地化していたため最近の再開発等に伴う発掘調査例が当該地域で増えてきている。また、千里丘陵からのびる低位段丘と茨木川が形成した沖積面に立地し、弥生時代中期から中世にかけての複合遺跡として周知されている。遺跡の範囲は南北約1km、東西0.4kmで遺跡の南端は東奈良遺跡と重複しており、今回の調査区は遺跡の南西隅に位置し、東奈良遺跡からも近接した場所にある。調査地の遺構検出面の標高は北端が(T.P) 10.6m、南東端が10.2mをはかり、地形的に北西～南東方向に緩やかな扇状地形を呈する。周辺の調査事例を概観すると平成8・9年度、14・15年度に高層マンション等を建設するために発掘調査が実施されており、今回の調査も共同住宅を建設するため、事前に発掘調査を実施したものである。

今回調査区の北側に隣接する平成15年度調査では、弥生時代後期の長楕円形土壙4基・溝1条・弥生時代後期半～古墳時代前期初頭頃の円形周溝9条・方形周溝1条、古墳時代後期前半頃の削平された古墳(円墳2基)・(方墳1基)を検出している。飛鳥時代中頃(7世紀中頃)・奈良時代後半～平安時代前期前葉(8世紀後半～9世紀前葉)頃では、区画溝17条・流路1条・建物跡1棟・柱列1条・井戸1基・雨落溝・土壙2基を検出している。平安時代後期(11世紀中葉～12世紀前半頃)では溝2条や建物を構成する柱穴群が検出されている。中世の遺構群は主に鍛溝や柱穴が検出されている。

平成14年度に調査が実施された場所では、主に弥生時代後期～古墳時代前期を中心とする溝・土壙等が検出されており、また、やや東に傾くも時期不明とされた2間×4間の掘立柱建物跡が検出されている。さらに北西に位置する平成9年度の調査では古墳時代中期～後期頃の削平された古墳の周溝が検出されている。

今回の調査は試掘調査を実施した結果、現地表面下(GL-)約0.5～0.6mで中世遺物包含層、GL-0.6～0.8mで古代遺物包含層および第1遺構面、GL-0.7～0.85mで第2遺構面に達したため、建築による掘削が及ぶ範囲を基本に調査区を設定した。調査は東と西に調査区を分割して反転調査としている。



調査地位置図

検出遺構

今回の調査で検出された遺構は、弥生時代後期～古墳時代前期初頭頃では溝（SD-2・3・26）や土塙（SK-4）、柱穴（SP-511・595）、古墳時代後期前半は古墳1（SD-4）や柱穴等が検出されている。

飛鳥時代（7世紀代）には掘立柱建物跡（SB-3・4）や溝（SD-5・6）等がある。

奈良時代（8世紀代）では掘立柱建物跡（SB-1・2）や土塙（SK-1）、溝（SD-8・9・11・14～17）、柱穴が検出されている。奈良時代末～平安時代前期（8世紀末～9世紀代）では、竪穴状遺構（SA-1）や建物跡を構成すると思われる柱穴群が検出されているが相対的に遺構が少ない。平安時代中期（10世紀代）では、掘立柱建物跡（SB-5）や柱列（SC-1・3・5・6）、建物跡や柱列を構成すると思われる柱穴群が多数検出されている。ほかに、土塙（SK-2・5～9）、井戸（SE-1）、溝（SD-10・30）がある。平安時代後期～鎌倉時代（11世紀～）では、井戸（SE-2）や柱穴群が検出されており、まさに複合遺跡の様相を呈している。

なお、調査区西半部は大規模なカクランを受けていたため、東半部ほど遺構は検出されなかつた。

基本層序

調査区の基本層序はⅠ層からⅥ層まで大別される。Ⅰ層は表土で0.4～0.9mの現代の盛土である。Ⅱ層は褐灰色シルトの旧耕土で、層厚0.1～0.2mをはかる。Ⅲ層はⅢ-1～4層まで細分でき、赤褐色シルト質埴土の床土で、0.1～0.25mをはかる。Ⅳ層はⅣ-1・2層に細分でき、灰黄色シルトを主体とし、赤褐色シルトやマンガンを含んだ中世遺物包含層で、層厚0.05～0.25mをはかる。Ⅴ層は単層で暗褐色土を主体とし、にぶい黄橙色シルトを含んだ古代遺物包含層で、層厚0.05～0.25mをはかる。Ⅵ層は地山層で黄橙色粘土である。遺構検出はⅤ層およびⅥ層上面で行なっている。

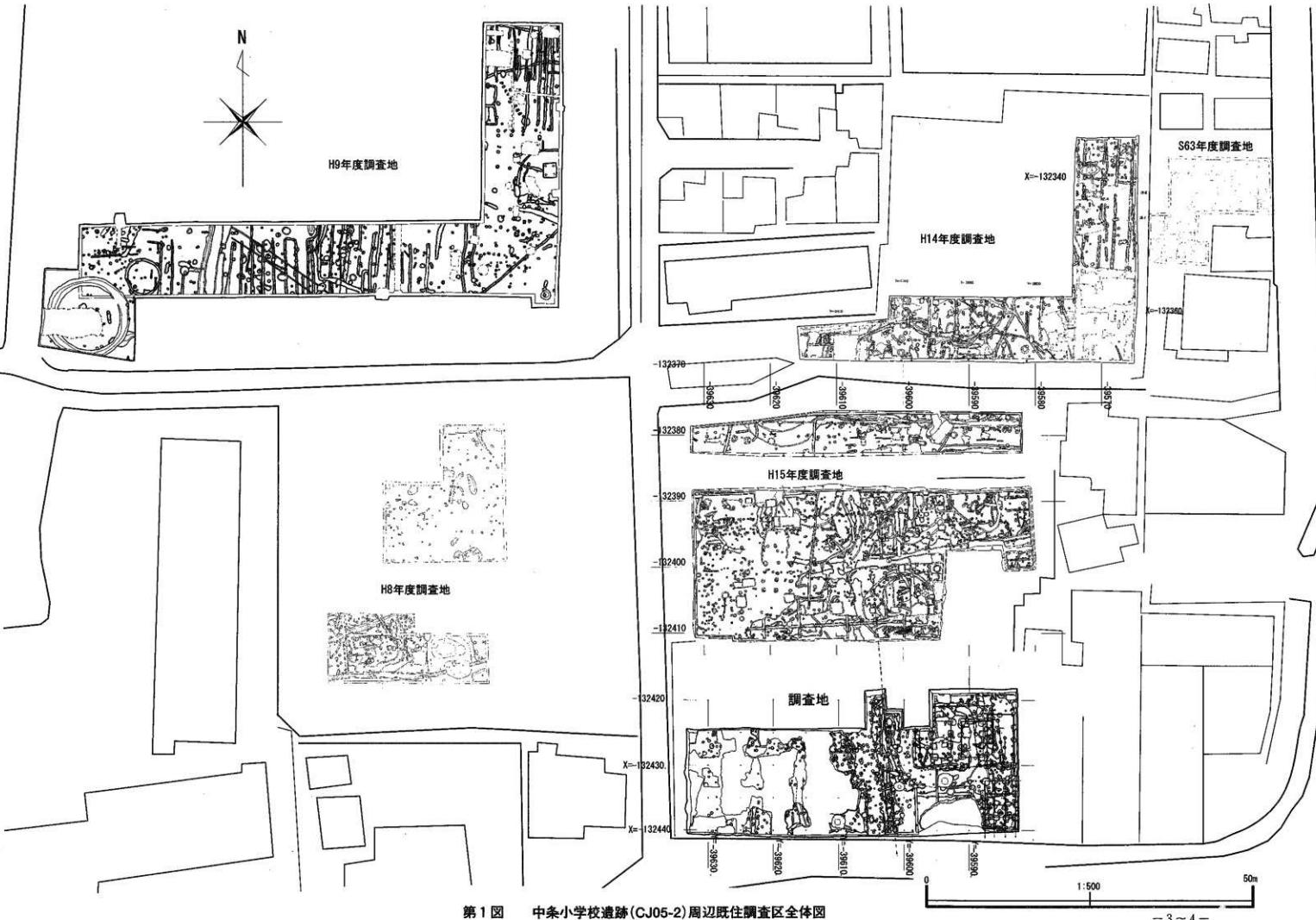
出土遺物

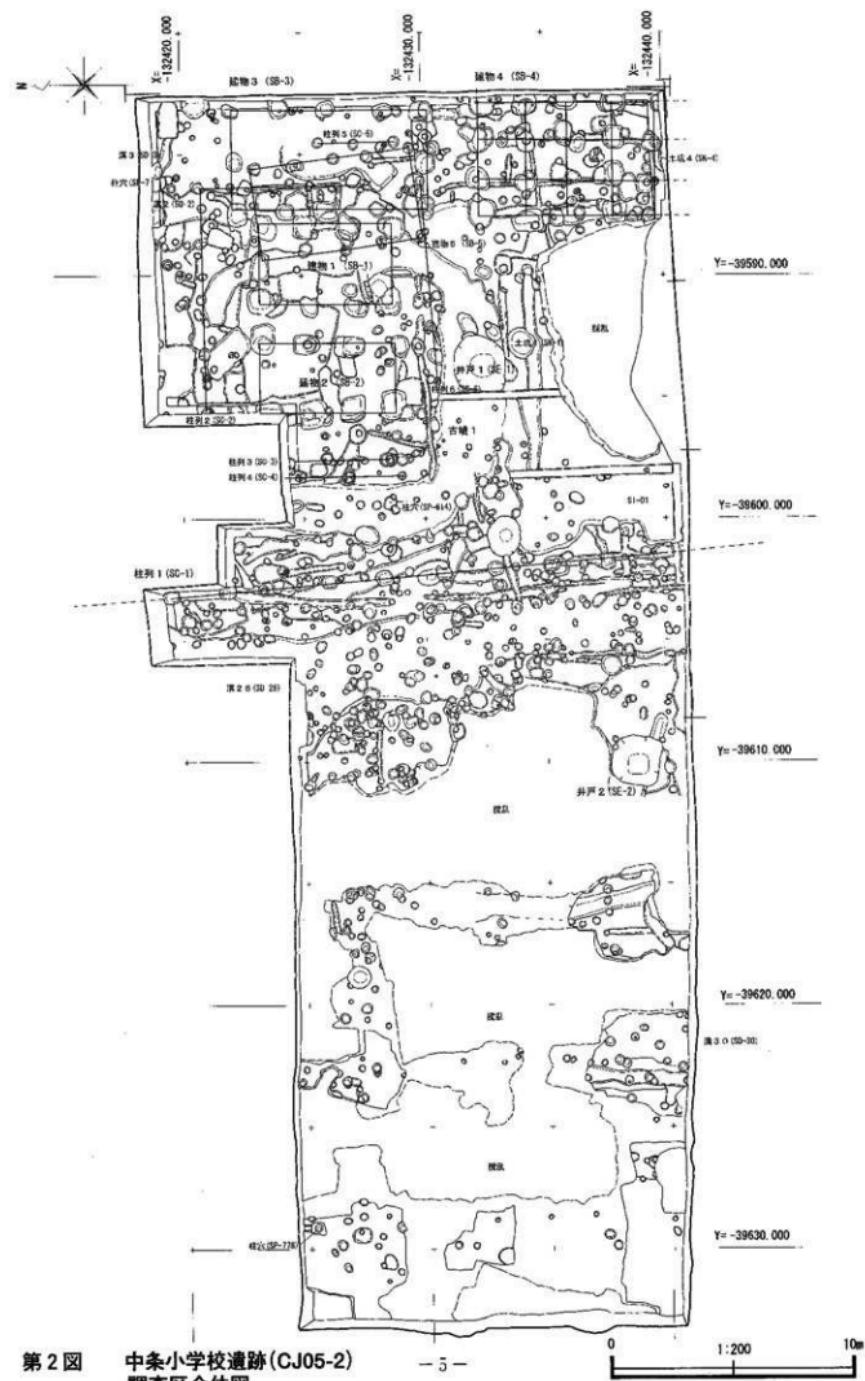
今回の調査において出土した遺物は遺物収納コンテナに換算して20箱出土している。弥生時代中期後葉～後期・後期後半～古墳時代前期初頭頃（主内式併行期）では、広口壺・無頸壺・複合口縁壺やタタキを施した弥牛形甕、古墳時代後期には、古墳1（方墳）の周溝（SD-4）から土師器高环1点・須恵器坏蓋6点・身5点、短頸壺1点、円筒埴輪4個体が出土している。飛鳥・奈良・平安時代の述物跡の柱穴からは須恵器坏蓋・身・高台付坏身・碗・長頸瓶・土師器皿・环・碗・壺・甕、黒色土器や瓦類（丸・平瓦）・埴・砥石・鉄製品（小刀中茎・鉄斧？）・柱材が出土している。井戸1（SE）からは多量の土師器皿・黒色土器・東播系すり鉢・井戸2からは瓦質羽釜・平瓦等が出土している。その他に古代遺物包含層や中世遺構から瓦器・白磁・二彩・緑釉陶器・フイゴの羽L・鉄滓等が出土している。SP-542からは須恵器坏蓋片に「七」とヘラ書きされたものが出土している。なお、掲載遺物の詳細は遺物観察表に記した。

弥生時代後期～古墳時代前期初頭

溝跡（SD-2・3・26）

SD-2・3は調査区北東端に位置し、SD-2は全長8.5m以上で、幅は1.25～1.4m、深さは0.2mで南北に延びる。埋土は褐灰色土主体で明黄褐色シルトを含む。出土遺物は口縁部に円形浮文を施した複合口縁壺や広口壺・無頸壺・椭円形状の磨石・タタキ甕・高环等が出土している。SD-3は全長1.8m以上で、幅は0.45～0.6m、深さは0.16mで北から東に弧を描くように延びる。埋土は黒褐色土主体で黄橙色シルトや明赤褐色の焼土粒を含む。出土遺物はSD-2と同様に円





第2図

中条小学校遺跡(CJ05-2)

調査区全体図

形浮文を施した複合口縁壺や広口壺、タタキ甕が出土している。時期はいずれも、概ね弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭（庄内式併行期）におさまるようである。SD-26は調査区中央に位置し、全長21.5m以上で、幅は3.2～3.5m、深さは0.16～0.3mでやや西に傾きを持つが南北に延びる。埋土は暗褐色土主体で褐灰色シルトを含む。出土遺物はタタキ甕が出土している。

古墳時代

古墳1（SD-4）

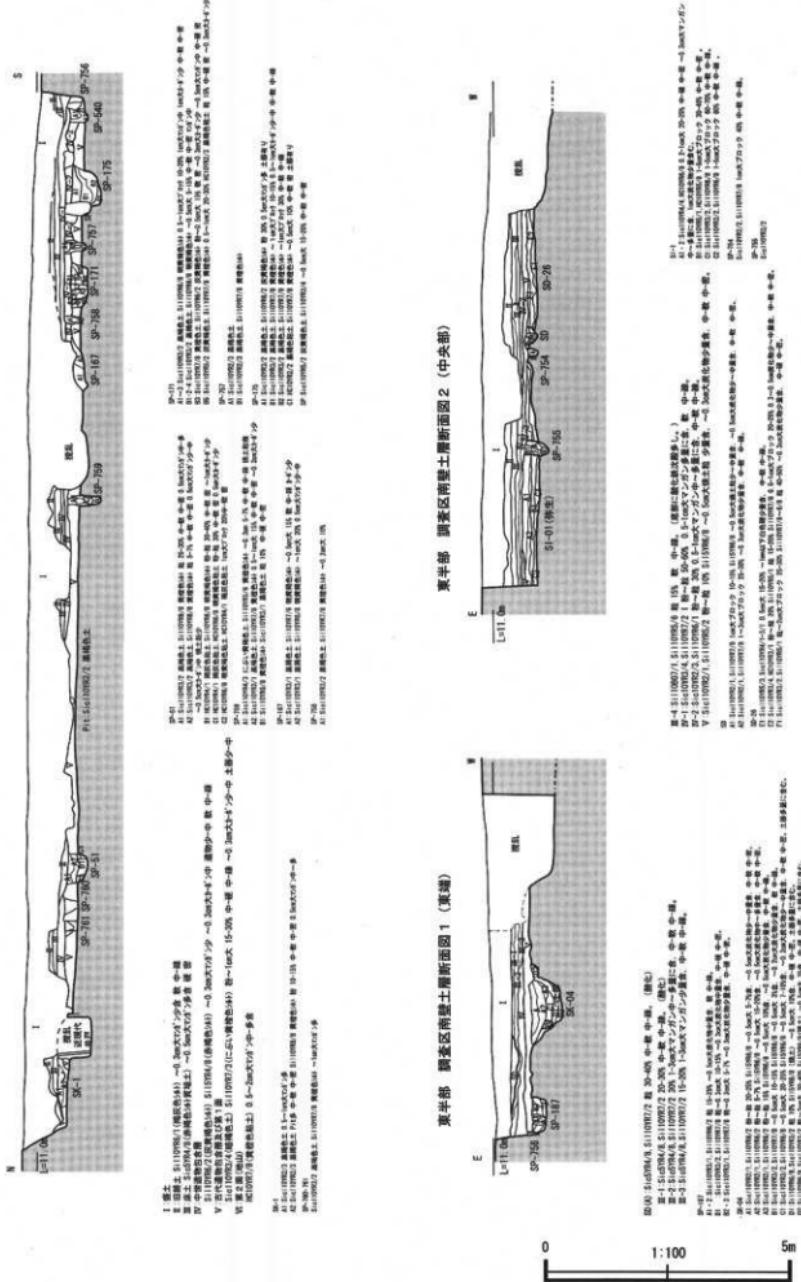
古墳1は調査区東半部やや北寄りに位置し、古代の建物跡や井戸等と重複して検出された。古墳の北西隅は調査区外になるため欠いているが、墳丘部が方形を呈することから方墳と思われる。また、重複しているこれら建物跡は古くても奈良時代（8世紀代）と考えられることから、この頃には、墳丘の盛土は削平され古墳の周溝は埋没していたものと想定される。古墳はほぼ東西南北方向を基調とし、古墳の墳丘規模は南北8.0m、東西8.5mをはかる。周溝の幅は1.2～2.3m、深さは0.15～0.3mをはかる。周溝を含めた古墳の直径は、南北12.7m、東西12.5mをはかる。溝の浅さからもわかるように著しく削平を受けており、主体部である埋葬施設は検出されなかった。溝の埋土は大きく4層に大別でき、A層は2層に細分でき黒色土主体で、明黄褐色～にぶい黄褐色シルトを含む。B層は3層に細分でき褐灰色シルト主体で黄橙色～明黄褐色シルトブロックを含む。C層は2層に細分できC1層は黒色土主体で、褐灰色シルトや黄橙色～明黄褐色シルトブロックを含む。C2層は褐灰色土主体で、多量の黄橙色～明黄褐色シルトブロックを含む。D層は単層で褐土土主体で、明黄褐色シルトを含む。

出土遺物は周溝内のA・B層中から検出されており、南側周溝あぜ③の東側に須恵器坏身と蓋が組み合わさった状態で、まとまって出土している。須恵器坏身はいずれも回転ヘラケズリが施され、器高4.0～4.6cm、口径9.7～9.9cm、体部最大径11.6～12.0cmをはかる。須恵器坏蓋も天井部回転ヘラケズリが施され、器高4.0～4.4cm、口径11.2～11.6cmをはかる。さらに付近からはほぼ完形の須恵器短頸壺も出土している。この短頸壺は、口縁が短く立ち上がり体部中央が大きく膨れる。器高15.5～16.3cm、口径9.4～9.7cm、体部最大径19.2cmをはかる。器面調整は内外面ともにタタキを施し、外面は後に口縁部～体部下半にカキメを施す。さらに、特徴的なのは焼成時につけた蓋の痕跡が肩部に見てとれ、さらに、底部外面にもリング状の痕跡が見られ、蓋の口径は13.4cmをはかる。また、東側周溝あぜ②付近および西側周溝あぜ④北側から、各2個体の円筒埴輪が倒壊した状態で出土している。いずれも埴輪下半～底部にかけて突帯1～2段日が欠落しており、残存高は25～32cm、口径は25～33cmをはかる。他には周溝南東コーナー付近から3孔の土師器高坏脚や壺・須恵器甕が出土している。これら出土遺物はその形態から6世紀前半代に収まるものと思われる。さらに、北側に隣接する平成15年度調査区でも古墳が3基（円墳2・方墳1）検出されており、いずれも今回の調査で検出された古墳と規模・出土遺物が類似しており、時期も6世紀前半代である。

古代～中世

建物・柱列跡（SB-1～5・SC-1～6）

建物跡（SB）は復元できるもので5棟、柱列（SC）は6条を数える。SB-1は1間×3間の南北棟で主軸は真北である。平面規模は3.16m×5.44m（17.2m²）、桁行間尺は1.81m、掘方は方形で長軸0.8～1.14m、短軸0.66～1.06m、柱痕跡は直径0.32～0.52m、柱の深さは0.22～0.9mをはかり、妻側の柱穴が深くなる。重複関係は古墳1を切り、SB-2が西側に並列する。遺物はSP-25・27・29～34から出土しているが、須恵器坏蓋・身と宝珠つまみがつく蓋・高台付坏身・長頸



第3図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 調査区断面図

瓶・甕・土師器皿・坏・壺・甕・高坏等が主に出土している。また、SP-31から砥石、SP-34から柱材が出土している。これらの特徴から8世紀代の遺構と推定される。

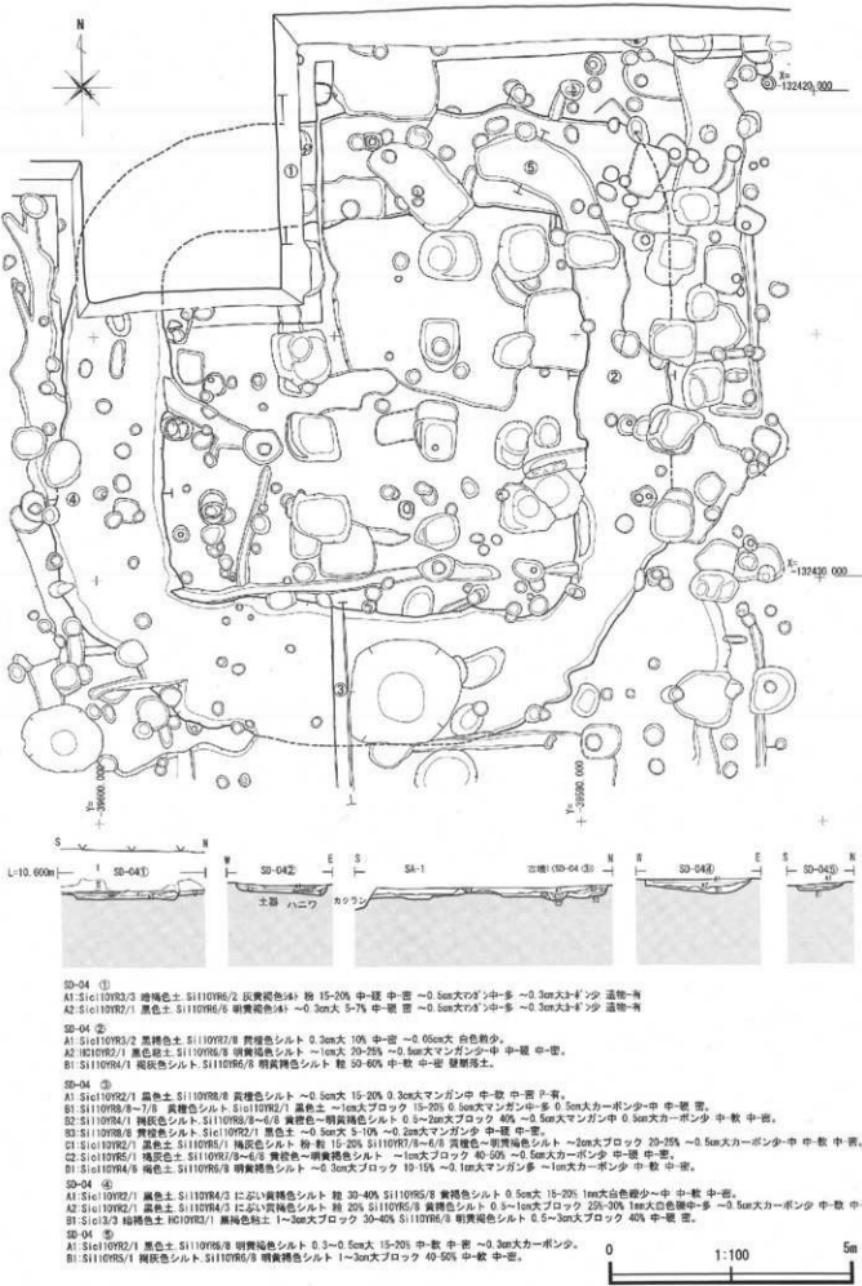
SB-2は1間×3間の南北棟で主軸は真北である。平面規模は2.92m×5.4m (15.8m²)、桁行間尺は1.8m、掘方は方形で長軸1.0~1.32m、短軸0.8~1.04m、柱痕跡は直径0.32~0.4m、柱の深さは0.2~0.68mをはかり、妻側の柱穴が深くなる。重複関係は古墳1を切る。出土遺物はSP-22~24・35・37~39から須恵器坏蓋・短頸壺・長頸瓶・甕片・土師器皿・坏・碗・甕、SP-37からは小刀の中茎が出土している。概ね時期はSB-1と同じ8世紀代と思われる。

SB-3は2間×4間の南北棟で主軸は真北である。平面規模は4.26m×8.06m (34.3m²)、梁行間尺は2.13m、桁行間尺は2.01m、掘方は方形で長軸0.64~1.0m、短軸0.64~0.88m、柱痕跡は直径0.2~0.35m、柱の深さは0.24~0.7mをはかる。2m南側には建物の通り筋を同じくして、総柱建物で倉庫と思われるSB-4がある。出土遺物はSP-50~59・63・80から須恵器坏蓋・身・甕・土師器皿・甕・高坏、SP-53から宝珠つまみの付く須恵器坏蓋、SP-54から土師器坏（ヘラ描き）が出土している。概ね7世紀前半代のものと思われる。

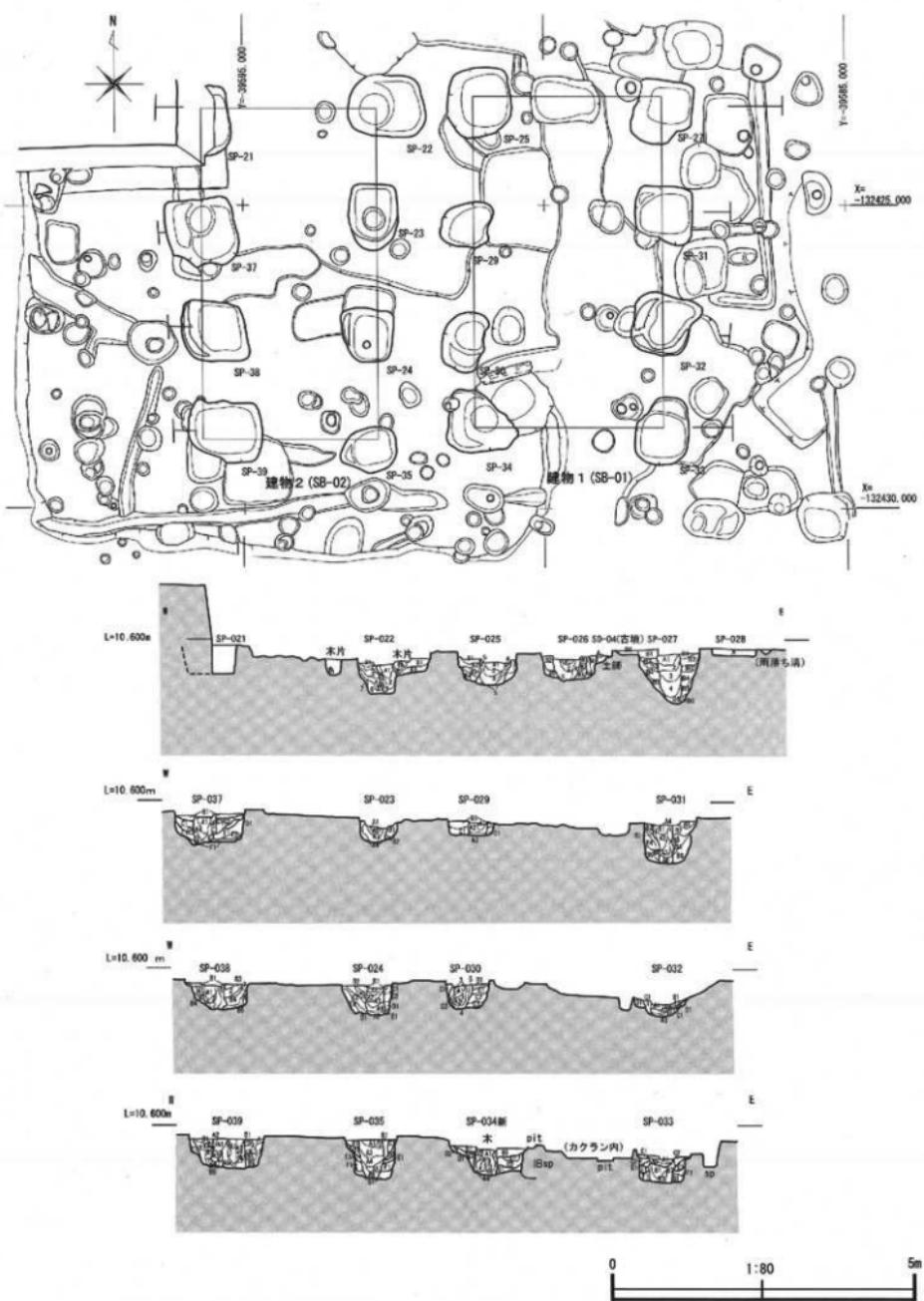
SB-4は3間×4間以上南北棟の総柱建物で、主軸は真北である。平面規模は4.72m×7.6m (35.9m²)、梁行間尺は1.57m、桁行間尺は1.9m、掘方は方形で長軸0.8~1.22m、短軸0.68~1.14m、柱痕跡は直径0.21~0.36m、柱の深さは0.2~0.58mをはかる。重複して柱穴が検出されていることから最低1回は建替えをしていることが伺える。出土遺物はSP-160~172・174~185から宝珠つまみの付く須恵器坏蓋・坏身・長頸瓶・壺・甕・土師器皿・坏・壺・甕、SP-175から柱材、SP-179から鉄斧状製品？が出土している。概ね7世紀前半代のものと思われる。

SB-5は2間×4間の南北棟で、主軸はやや西に傾きN 6° Wである。平面規模は3.76m×6.6m (24.8m²)、梁行間尺は1.88m、桁行間尺は1.65m、掘方は方形で長軸0.4~0.67m、短軸0.3~0.46m、柱痕跡は直径0.18~0.23m、柱の深さは0.23~0.48mをはかる。出土遺物はSP-130から須恵器壺・土師器片、SP-132・134から土師器片が出土しており、10世紀代のものと思われる。

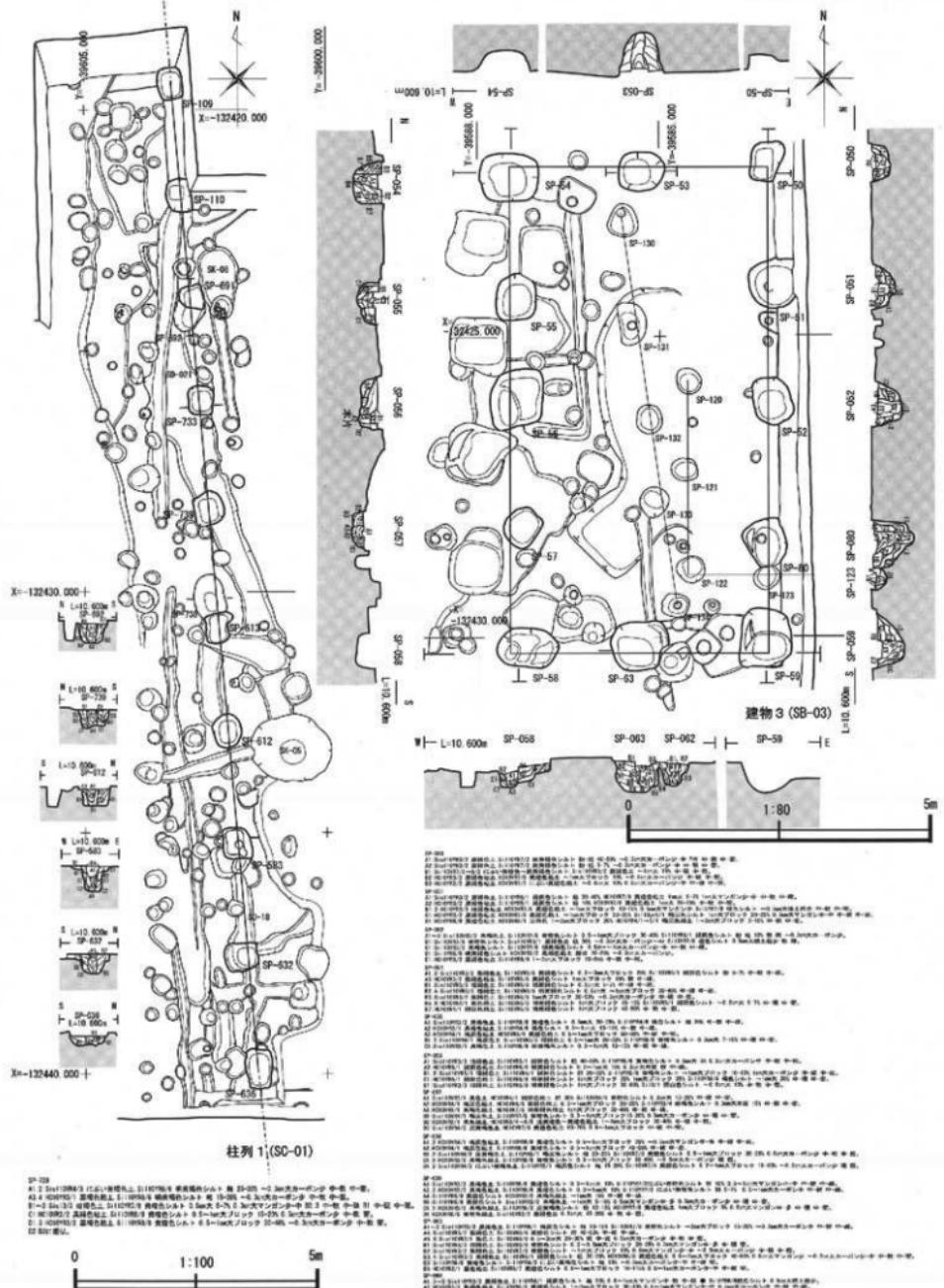
SC-1は調査区中央部に北北西-南南東方向に延び、9間以上で主軸はN 5° Wである。規模は全長21.2m以上、間尺は2.35m、掘方は方形で長軸0.6~0.85m、短軸0.45~0.6m、柱痕跡は直径0.18~0.28m、柱の深さは0.25~0.5mをはかる。出土遺物はSP-583・612・613・632・636・691・733から須恵器坏蓋・甕・甕・土師器坏・甕・黒色上器等が出土しており、10世紀代のものと思われる。SC-2はSB-1・2の北側2.3mに位置し、4間以上で主軸は東西方向に正しく延びる。規模は全長9.3m以上、間尺は2.32m、掘方は方形で長軸0.5~0.6m、短軸0.45m、柱痕跡は直径0.17~0.2m、柱の深さは0.3~0.47mをはかる。出土遺物はSP-5から須恵器坏蓋・甕・土師器皿（ての字状）・甕、SP-6から土師器片が出土している。SC-3~5はいずれも主軸は真北で、2間もしくは2間以上である。SC-3の規模は全長4.2m以上、掘方は方形で長軸0.65m、短軸0.5m、柱痕跡は直径0.2~0.27m、柱の深さは0.2~0.37mをはかる。出土遺物はSP-616から土師器甕が出土している。SC-4の規模は全長4.26m以上、掘方は円形で直径0.3~0.5m、柱痕跡は直径0.1~0.15m、柱の深さは0.2~0.3mをはかり、出土遺物はない。SC-5の規模は全長3.2m、掘方は円形で直径0.4~0.45m、柱痕跡は直径0.14~0.18m、柱の深さは0.2~0.34mをはかる。出土遺物はSP-120~122から須恵器甕・土師器坏・皿・甕が出土している。SC-6はやや南に傾くが東西方向に延びる。規模は4間で全長8.3m、掘方は円形で直径0.3m、柱の深さは0.3~0.4mをはかる。出土遺物はSP-550から須恵器坏・土師器片、SP-590から土師器皿が出土している。



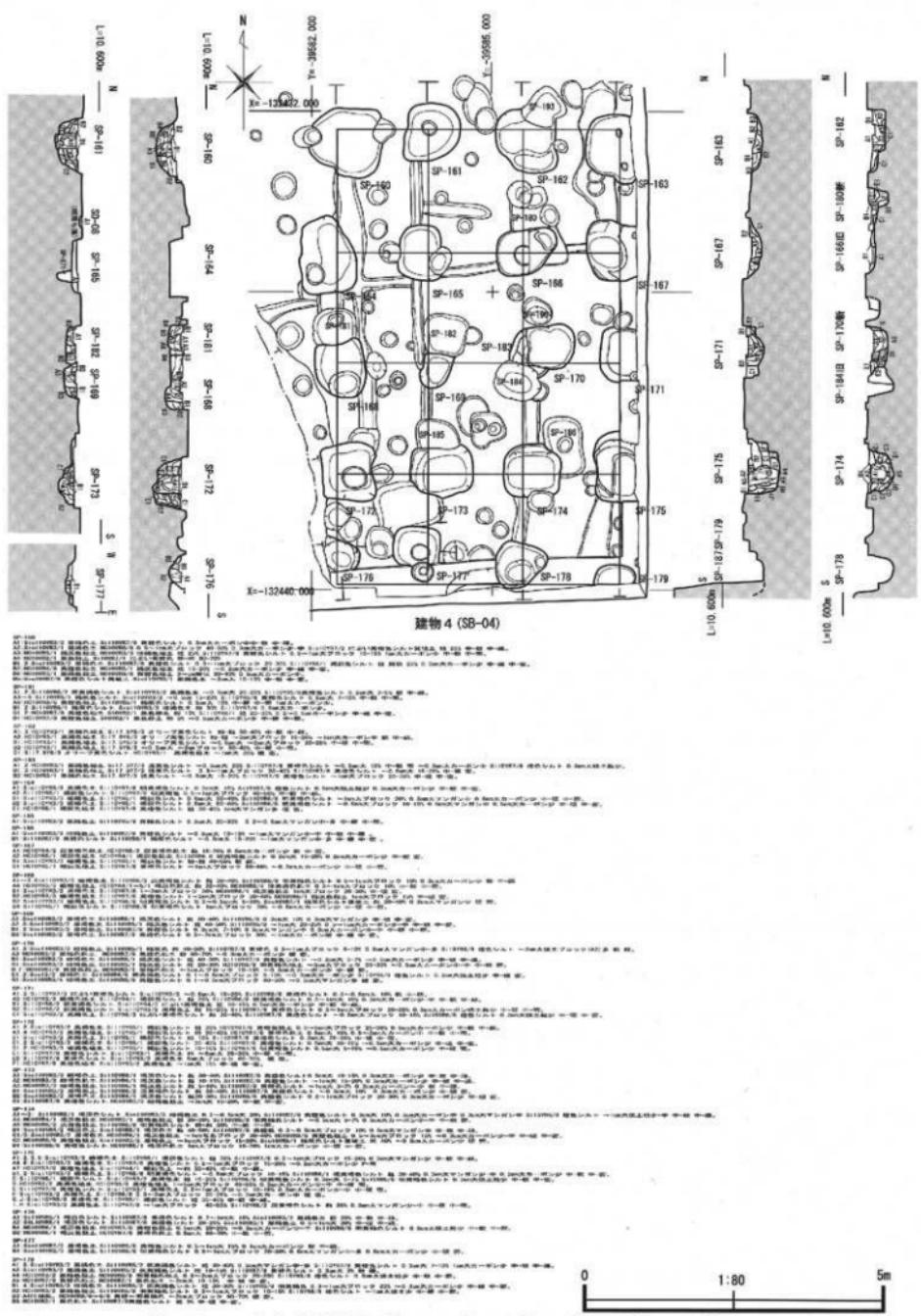
第4図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 古墳1 (SD-04) 平・断面図



第5図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 建物1・2 (SB-01/02) 平・断面図



第6図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 建物3 (SB-03) /柱列 (SC-01) 平・断面図



第7図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 建物4(SB-04) 平・断面図

井戸跡（SE-1・2）

SE-1は調査区東半部古墳1の南側周溝に重複しており、平面形は方形で、南北2.15m、東西2.3m、深さ1.4mをはかる。埋土はA～F層の6層に大別され、A層は暗褐色～にぶい黄褐色土に灰黄褐色シルト、B層は黒褐色粘土ににぶい黄橙色シルト、C層は灰黄褐色シルトに少量の黒褐色土、D層は黒色粘土ににぶい黄橙色シルト、E層はにぶい黄褐色土に灰黄褐色シルト、F層は灰白色～褐灰色粘土に黒褐色粘土が互層状に入る。埋土上層のA～C層からは、瓦器碗、下層のD～F層からは多量の土師器皿（て字状）・高台付环身・黑色土器碗が出土していることから、SE-1は概ね10世紀後葉頃の遺構と思われる。

SE-2は調査区中央南端に位置しており、平面形は方形で、南北2.0m、東西2.0m、深さ3.67mをはかる。埋土はA～W層の23層に大別され、深さ1.7mより下層で井戸枠の木質部を確認している。井戸枠の内側は0.96mの幅があり、井戸底面まで続いている。井戸枠の裏込めには主に褐灰色粘土が用いられており、礫はあまり入っていないかった。最上層のA～D層中からは土師器皿・瓦器・白磁片、E～I層中では土師器羽釜・束口系すり鉢・瓦、J・K層からは土師器皿・羽釜・瓦器碗・平瓦、L～N層からは土師器皿・黑色土器、下層のS～U層からは土師器皿・瓦質羽釜、V・W層からは土師器片が出土していることから、12世紀末～13世紀頃（鎌倉時代）の遺構と思われる。

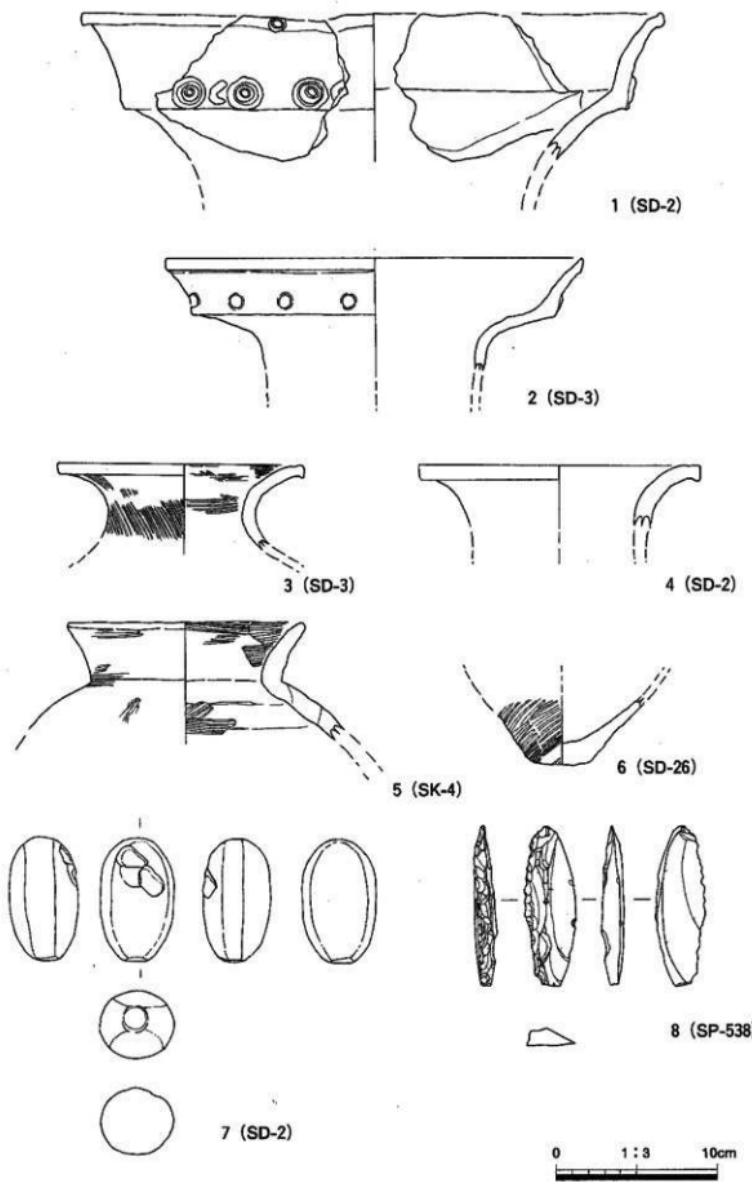
まとめ

今回の調査では弥生時代後期の溝等の遺構を確認したが、H15年度調査時のように後期後半から古墳時代前期初頭（庄内式併行期）に移行する時期のものと思われる多数の円形周溝を中心とした遺構群は検出されなかった。

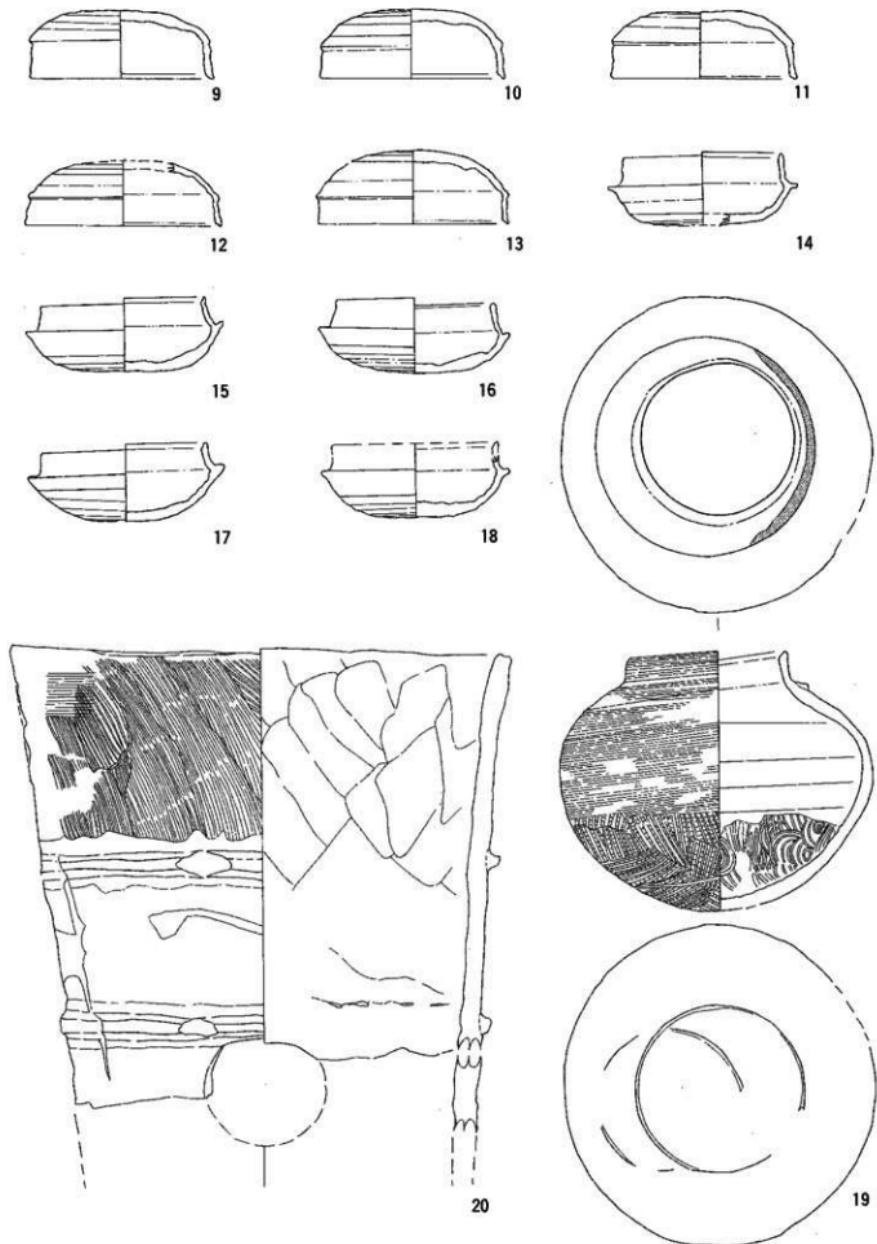
古墳時代には今城塚古墳に供給された新池埴輪製作遺跡で製作されたC期の埴輪が、三嶋地域に広くゆき渡っていたとされ、MT15型式の須恵器と共に伴していることが報告されている。また、総持寺古墳群では新池産の埴輪が供給されており、C期の埴輪が、今回調査された古墳の時期とほぼ同時期であることから、出土した埴輪が新池産であるか興味深いところである。さらに、ここ数年の調査において、明らかに当該地に古墳群が形成されていたことを示す資料が増加してきた。周辺既往調査区全体図でみても、半径100m以内で5基（円墳3・方墳2）の古墳が確認されている。古墳群の規模がどの程度のものであるかは今後、周辺の調査状況で明らかになっていくものと思われる。

古代では、当該地域にH14年度調査ではじめて建物跡が確認されてから、H15年度・今回と引き続き建物跡を中心とする古代の遺構群が多数確認されるようになった。特に、今回の調査では飛鳥時代・奈良時代～平安時代の建物跡、柱列群、井戸等の遺構群が検出され、また、建物跡は真北を基準として、理路整然と計画的に配置したことが窺えた。柱列群に関しては、建物となる可能性も高く慎重に検討を要するものと考え、柱列としている。さらに、SC-1はH15年度調査区の遺構と繋がり、全長は40mを超えるものと思われる。出土遺物では須恵器・土師器以外にも10点程の瓦と埠が出土していることが挙げられる。以上のことから、律令期における当該地のあり方等をも考慮して、さらに慎重に検討していきたい。

※ 出土した瓦については、森郁夫氏（帝塚山大学大学院）ならびに網信也氏（（財）大阪府文化財センター京阪調査事務所）にご助言を賜り、誌面ではありますが記して感謝申しあげます。

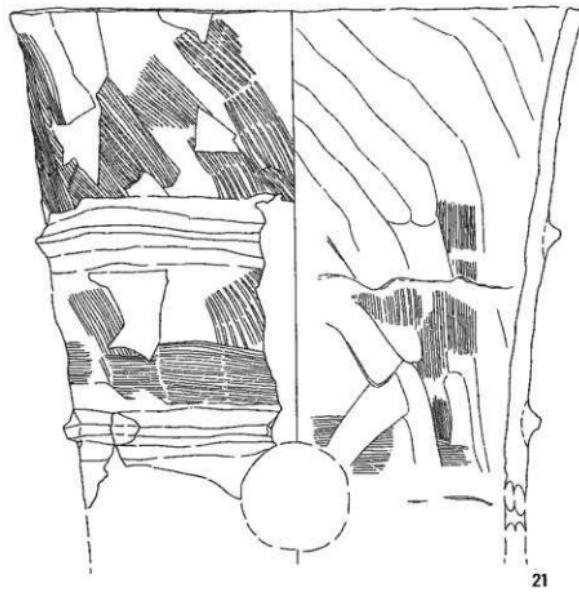


第8図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物(1)

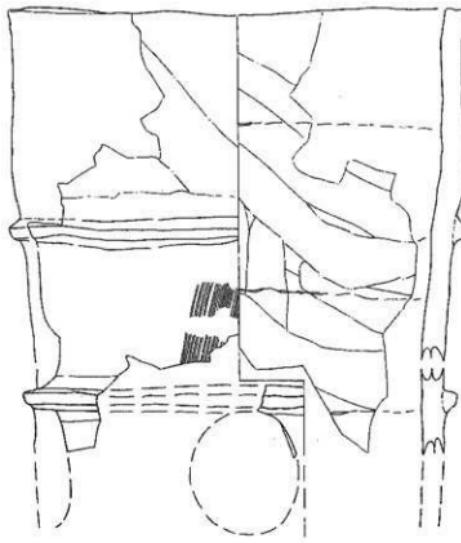


第9図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 古墳1出土遺物(2)

0 1:3 10cm



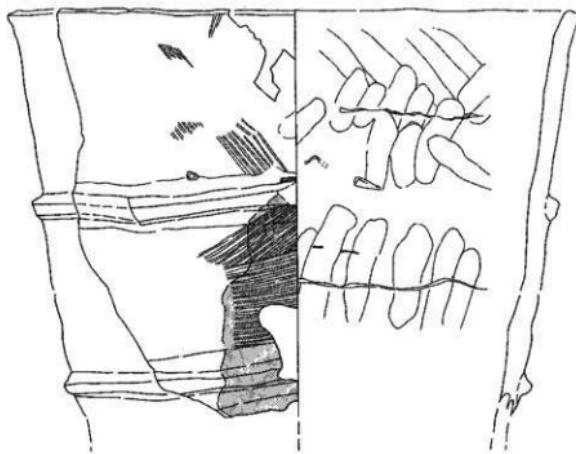
21



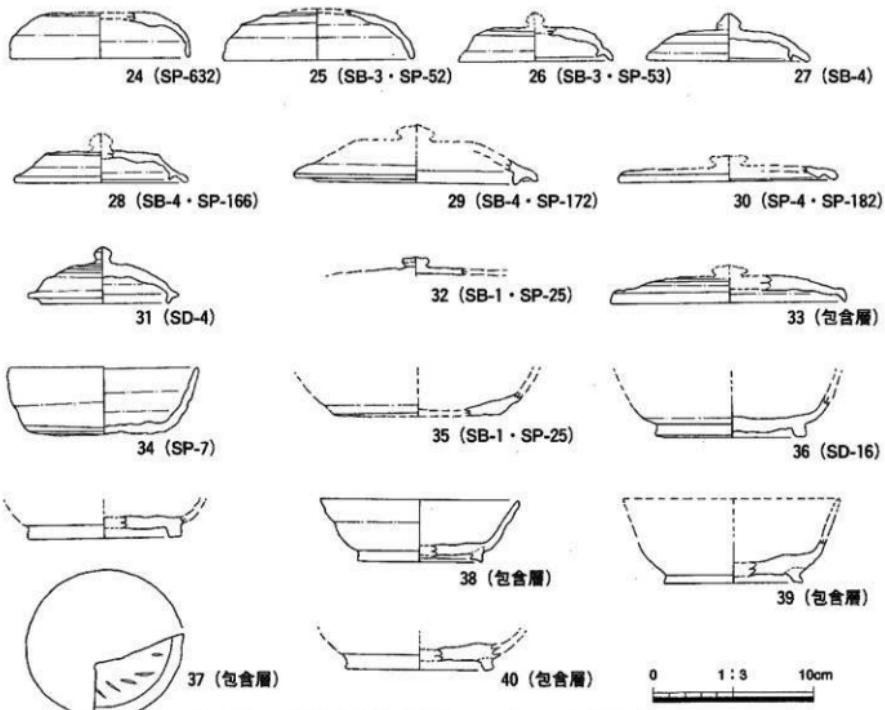
22

0 1 : 3 10cm

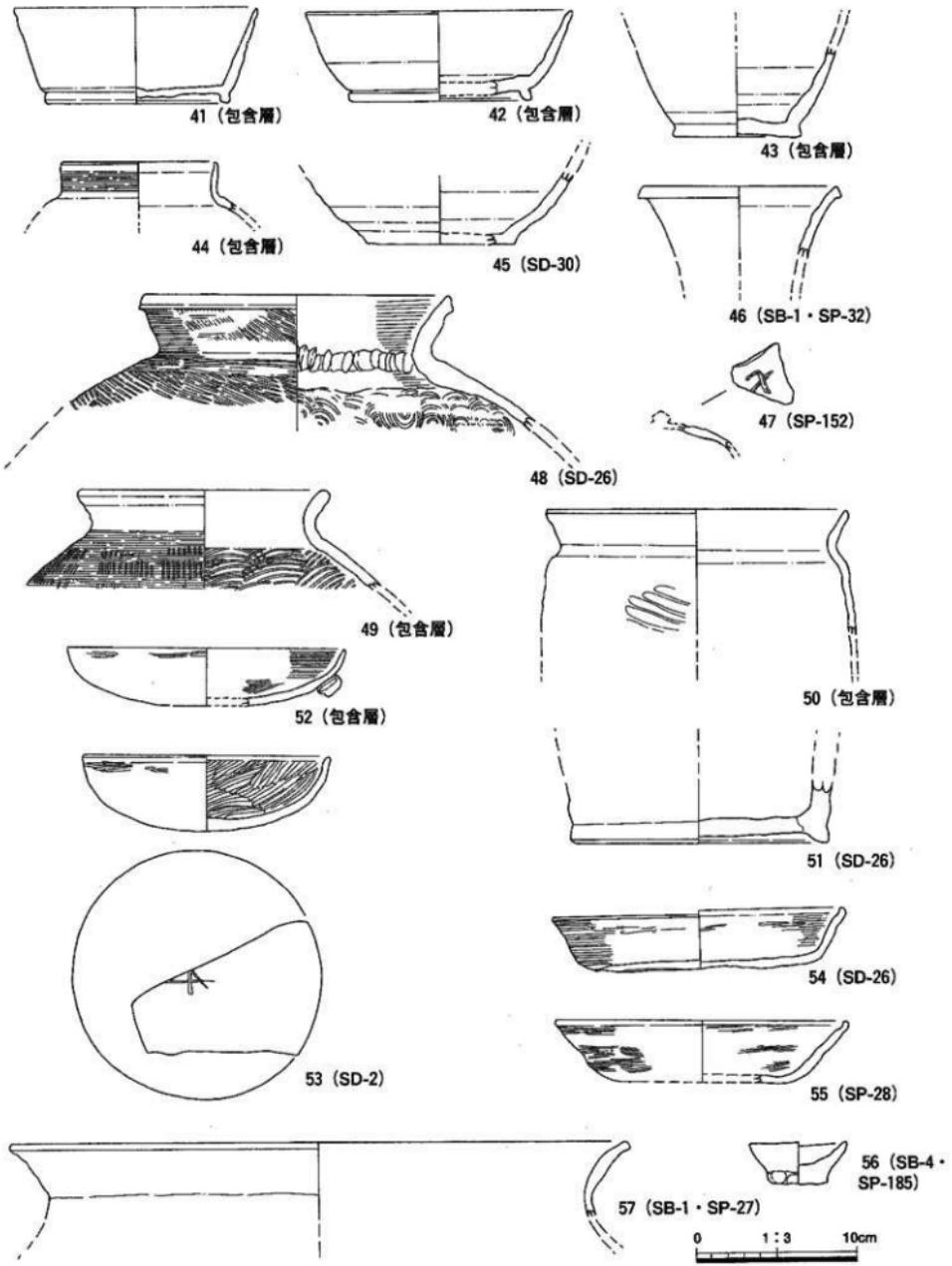
第10図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 古墳1出土遺物(3)



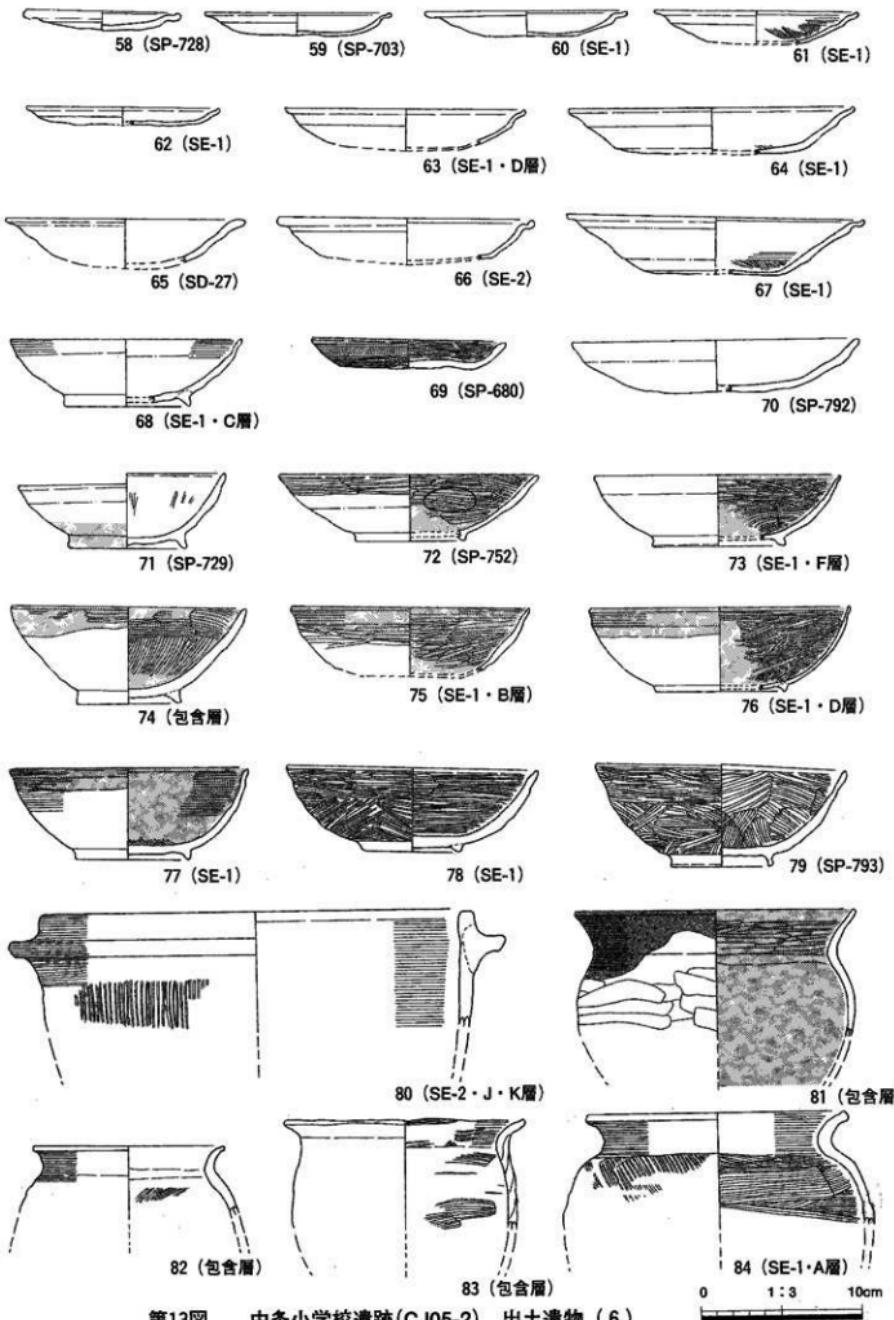
23 (古墳1)



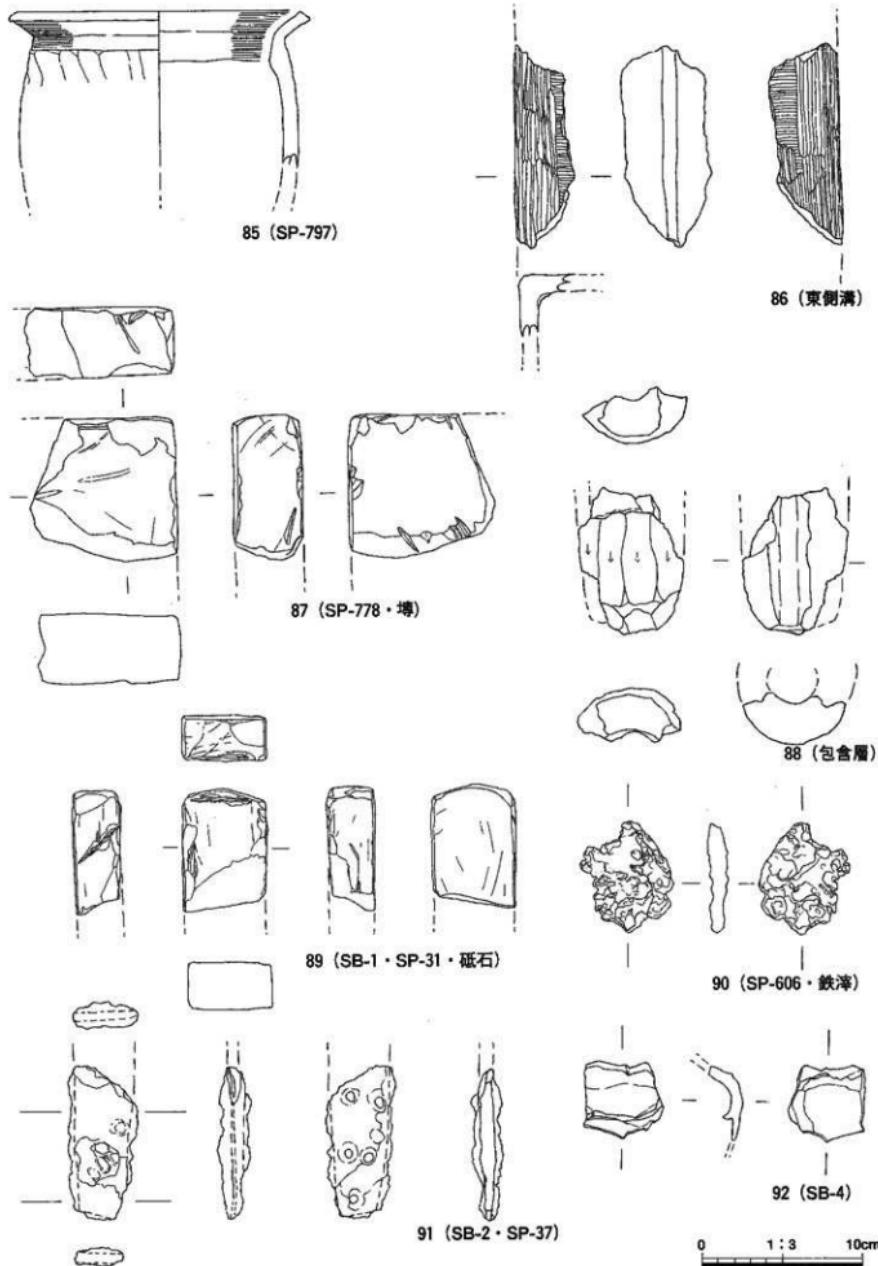
第11図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物 (4)



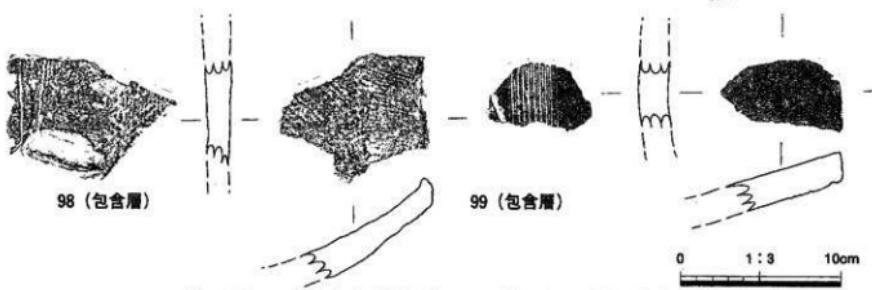
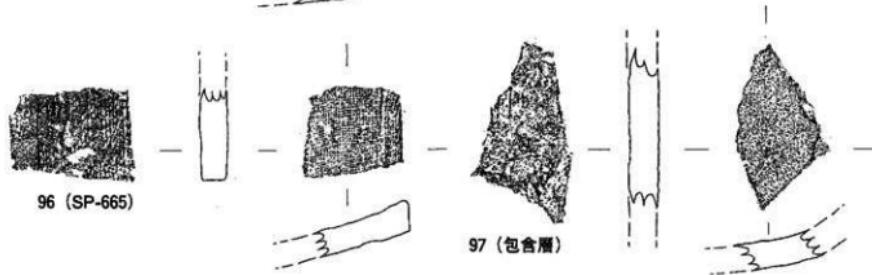
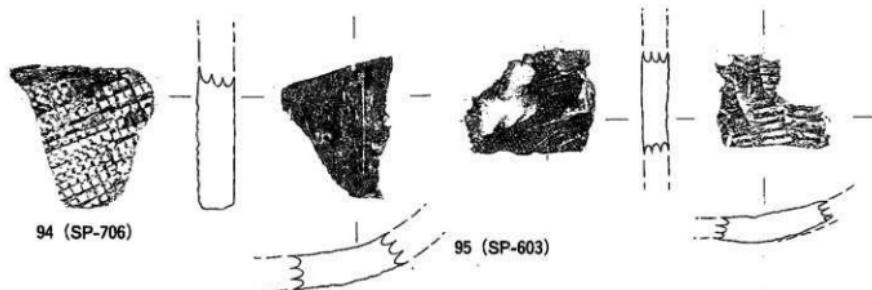
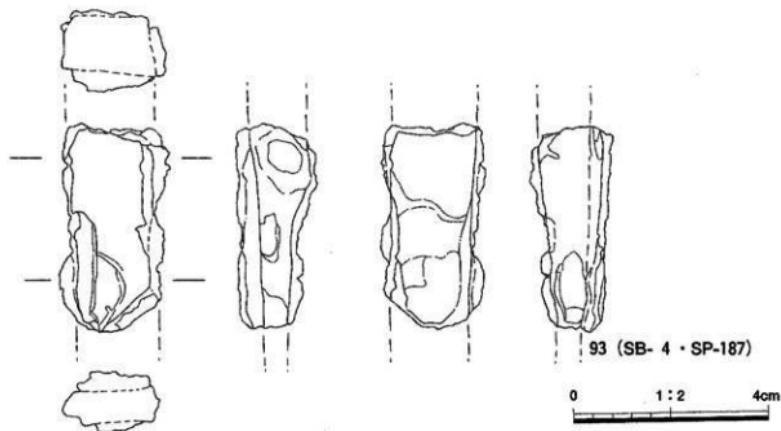
第12図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物(5)



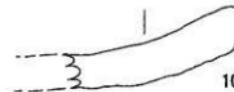
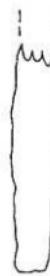
第13図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物(6)



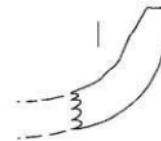
第14図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物 (7)



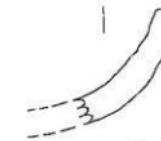
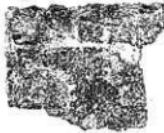
第15図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物 (8)



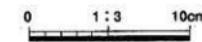
100 (SE-2・J・K層)



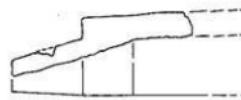
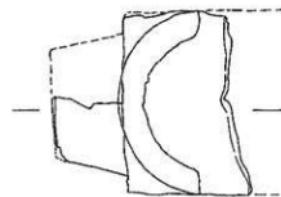
101 (SP-752)



102 (SP-749)



第16図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物(9)

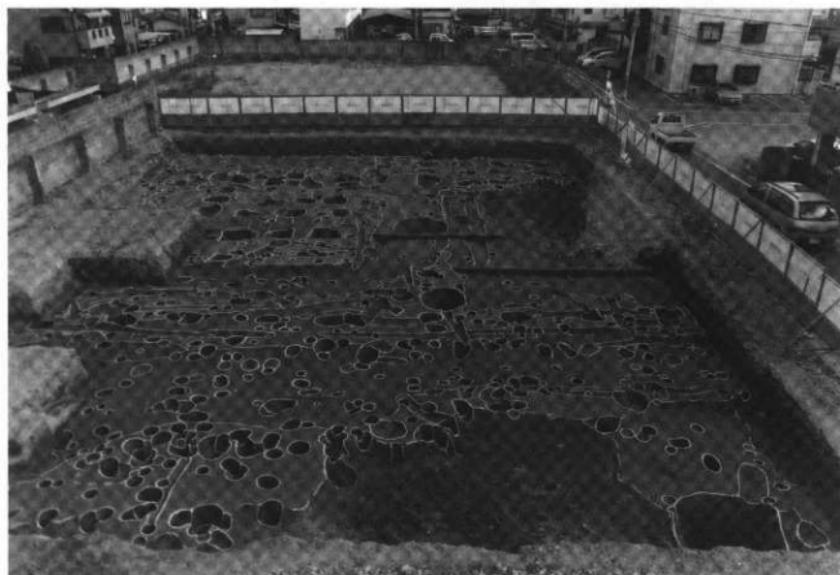


103 (SP-752)

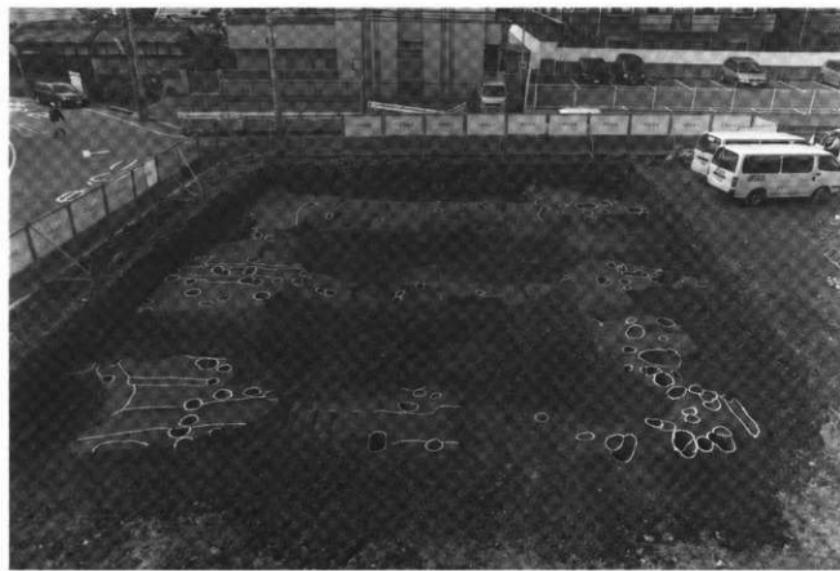
0 1 : 3 10cm

第17図 中条小学校遺跡(CJ05-2) 出土遺物 (10)

中条小学校遺跡(CJ05-2) 遺物觀察表



東工区 全景（西から）



西工区 全景（東から）

第18図 中条小学校遺跡(CJ05-2)(1)

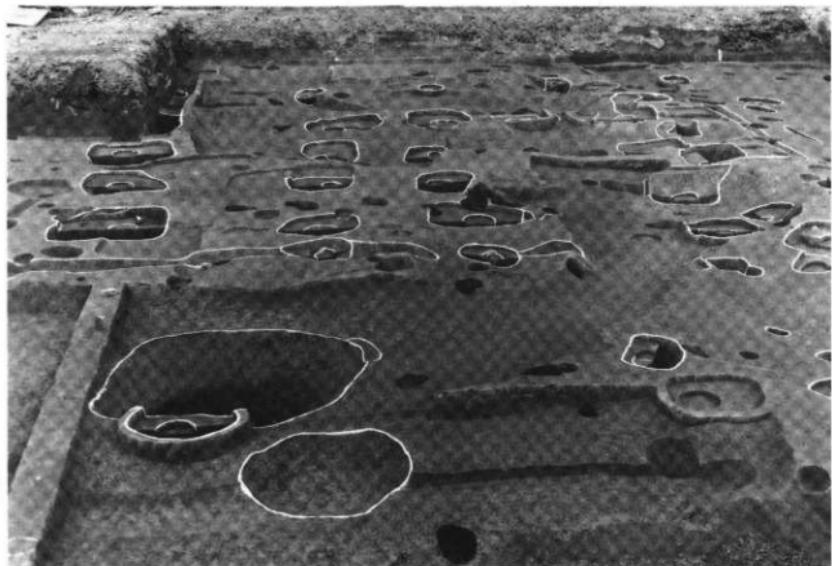


古墳1 全景（西から）

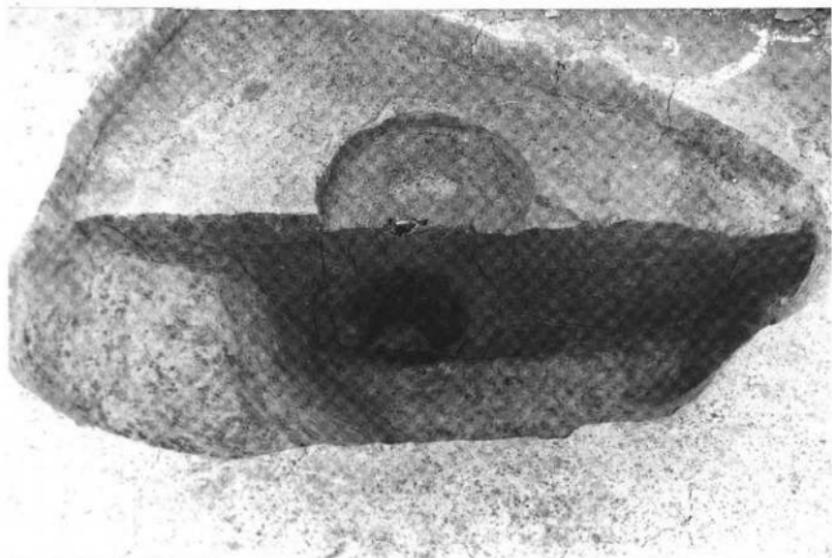


古墳1 全景（南東から）

第19図 中条小学校遺跡(CJ05-2)(2)



SB-01 (右)・SB-02 (左) 全景 (南から)

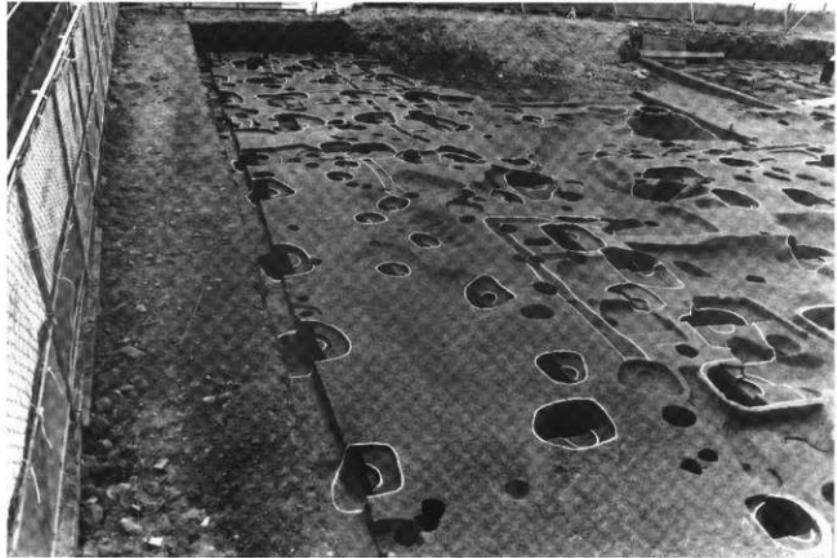


(SB-01) SP-34 断面 (南から)

第20図 中条小学校遺跡(CJ05-2)(3)

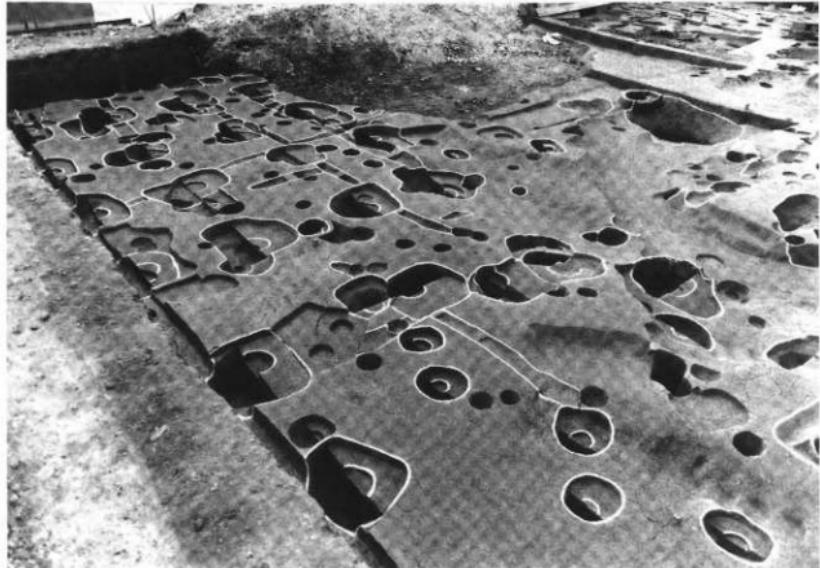


SB-01（手前）・SB-02（奥） 全景（西から）



SB-03 全景（北から）

第21図 中条小学校遺跡(CJ05-2)(4)



SB-04 全景（北東から）



SC-01 全景（北から）

第22図 中条小学校遺跡(CJ05-2) (5)

穂積廃寺跡

所在地 茨木市上穂積三丁目・四丁目地内

調査原因 土地区画整理事業

調査期間 平成17年11月21日～平成18年3月31日

調査面積 1443.6m²

調査担当 宮脇 薫

調査結果

上穂積西上地区画整理事業に伴い、試掘調査を実施したところ、包含層・遺物・遺構とも発見されたため、市道となる部分について発掘調査を行った。

穂積廃寺のあったとされる位置は、名神高速道路の茨木インターチェンジの南部の茨木市上穂積三丁目・四丁目の千里丘陵の東端にあたる部分とされてきた。東側には南北に通る旧道である亀岡街道（大坂道）が貫き、北側には西国街道（旧山陽道）が東西に交わっている。

西側の千里丘陵沿いには、郡神社古墳・見付山古墳・少し南に窯塚として知られている上寺山古墳、丘陵上には見付山遺跡・弁天山遺跡・上穂積山古墳などの遺跡が点在している。

北東にはインターチェンジ建設時に大規模に発掘調査され、弥生時代の方形周溝墓が多数出土し、また、以後の時代の根津国嶋下郡衙跡と考えられている郡遺跡が広がっている。

この調査地の小字名は、上ノ橋と言い、読みはドウノハシであり、「堂の端」とも考えられ、西の隣接地の小字名には「千現寺」とある。その南の小高い一画の公園となっている部分があるところから、そこが穂積廃寺のあった本来の位置ではないかとされている。

基本土層は、耕上が15～30cm、淡黄色土層（床土）が5～25cm、茶褐色土層（包含層）が5～35cmである。その下層の黄色粘土層が遺構面となっている。

調査区は、整理事業地に計画された道路に従って東西道路の北をⅠ調査区、南をⅡ調査区、南北道路の東をⅢ調査区、西をⅣ調査区の4調査区に分けて調査を実施した。

Ⅰ・Ⅱ調査区の各東半分およびⅢ調査区は、西に広がる千里丘陵の麓部にあたり平坦である。

Ⅰ・Ⅱ調査区の西半分およびⅣ調査区は千里丘陵の裾野部であり緩やかな傾斜地となっている。
検出遺構

各調査区において、径が40～65cmの円形・不整円形、一辺が35～65cmの隅丸方形の比較的規模の大きい柱穴が多数検出された。埋土から6世紀中～7世紀前半の須恵器・土師器片・瓦片が出土している。各調査区の幅が狭小であるので、掘立柱建物として捉えることができたのは、Ⅲ調査区の2間×3間のものだけで、特に調査区の南東地域に密の状態の様相を示している。

Ⅳ調査区の中央部から南半に、径が約3.4m、深さ約2.5mの不整円形の上塙が3基検出された。埋土は暗褐色土であり、遺物はなかった。

Ⅱ調査区の中央部の北で約1.5m²の瓦溜まりが一か所認められた。瓦は飛鳥時代の平瓦片で

あった。

Ⅲ～Ⅳ調査区の南端部からⅡ調査区にかけて、幅約3m、深さ約0.6mの溝が2条検出された。遺物はなかった。

出土遺物は6世紀から7世紀の須恵器・土師器・単弁蓮花紋や複弁蓮花紋軒丸瓦、重弧紋軒瓦、丸瓦や平瓦が出土している。平瓦には、外面に格子叩き、燃り糸叩きや内面に布目の残っているものもあり、埠片が出土している。

この近辺の飛鳥時代の瓦窯で知られているのは、約5km南方の吹田市山田に存在する吹出須恵器窯跡群であるが、どこの瓦窯で製作された可能性が強いかについては、出土瓦がいくつかの製作時期のものが出土していることからも考えられるが、窯の構造に関連するものも出土していないので不明ではある。

Ⅳ調査区で検出された大型の土塙は土取り跡の可能性があると思われ、この穂積廃寺の創建は飛鳥時代ではないかと考えられる。

嶋上郡の芥川廃寺の立地が嶋上郡衙跡の側にあったかとされるのと同様に、この調査地の穂積廃寺も嶋下郡衙跡とされる郡遺跡に隣接しているのも興味深い。このことから初期の仏教の地方への波及の仕方は地方の豪族が主体となっていたと考えられ、あるいは律令体制が順次整備されるとともに仏教が広められていったことを表しているのではと考えられる。



第23図 穂積廃寺跡調査地位置図



第24図 穂積廃寺跡調査区全体図



I 調査区（東）



I 調査区（西）

第25図 穂積廐寺跡発掘写真(1)



II 調査区（中央）

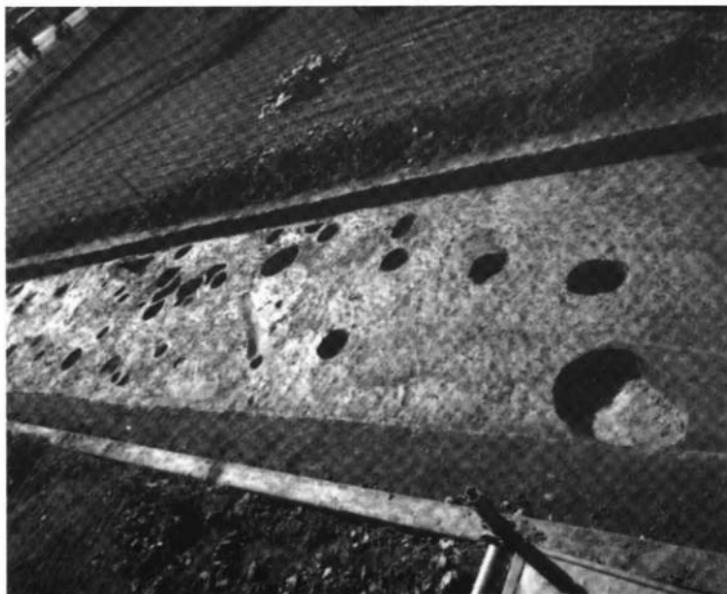


II 調査区（西）

第26図 穂積廃寺跡発掘写真(2)



III調査区



III調査区

第27図 穂積廐寺跡発掘写真(3)

茨木遺跡

所在地 茨木市本町1398-4

調査原因 共同住宅新築

調査期間 平成18年5月1日～

平成18年5月31日

調査面積 268m²

調査担当 黒須 靖之

調査結果 茨木遺跡は市内中心部の阪急京都線茨木市駅の北西に近接しており、北から上泉町・東宮町・片桐町・本町・宮元町・元町・大手町にかけて広がる中世～近世の集落跡を主体とした遺跡である。茨木遺跡は茨木川沿いの左岸に南北に展開し、北側では安威川と茨木川が合流するため閉塞的な地形を呈している。遺跡の範囲は南北に約1km、東西約450mで、遺跡内の半分は古くから閑静な住宅街が広がっているが、南側は駅から近いこともあり、茨木市の中心部として商業的役割を担う地域になっている。

茨木遺跡の周辺では、東に弥生時代前期の井堰跡が確認された牛込遺跡や、安威川を挟んで北東対岸に群集墳や古代の大集落が展開する総持寺遺跡、茨木川（現 川端通り）を挟んで北西には弥生時代の方形周溝墓群や古墳時代の集落・古墳がある郡遺跡が位置している。

また、これまで茨木小学校付近を中心に茨木城があると推測されてきたが、これまで当該遺跡では遺跡の南側を中心に発掘調査が3例行われたのみで現在まで推移してきている。この3件の発掘調査では直接的な茨木城跡に関連する遺構は確認されていないことから、今回の発掘調査が茨木城跡に関連する最初の調査事例になる。今回の調査は確認試掘調査を平成18年3月末に実施した結果、中世～近世の遺構・遺物が確認されたことから、約1ヶ月間の協議の末、発掘調査を実施するにいたった。さらに、今回の調査地は、平成17年11月に行われた「茨木城シンポジウム」において、茨木城の東堀と想定された場所での発掘調査であり、明治期の地籍図によると材木町に属しており、茨木城跡推定地からは南東に200m程離れた所に位置する。



調査地位置図

基本層序

調査区の基本層序は複雑で、広範囲で普遍的な堆積層は確認できなかった。いずれも、各時代に度重なる地業・洪水・改変等によりその堆積状況は理解に苦しむところである。その要因のひとつとして、茨木城廢城後、在郷町として存在したことにより後世に人が絶え間なく生活し、また現代にいたっては商業的位置を担うことからも伺えよう。おおむね、GL-0.4~0.8mは幕末~現代にいたる盛土やカクラン層である。それ以下は江戸時代から古墳時代までの生活面が展開するが、調査区断面のほとんどが各時代の整地層や遺構埋上、洪水層である。

検出遺構と出土遺物

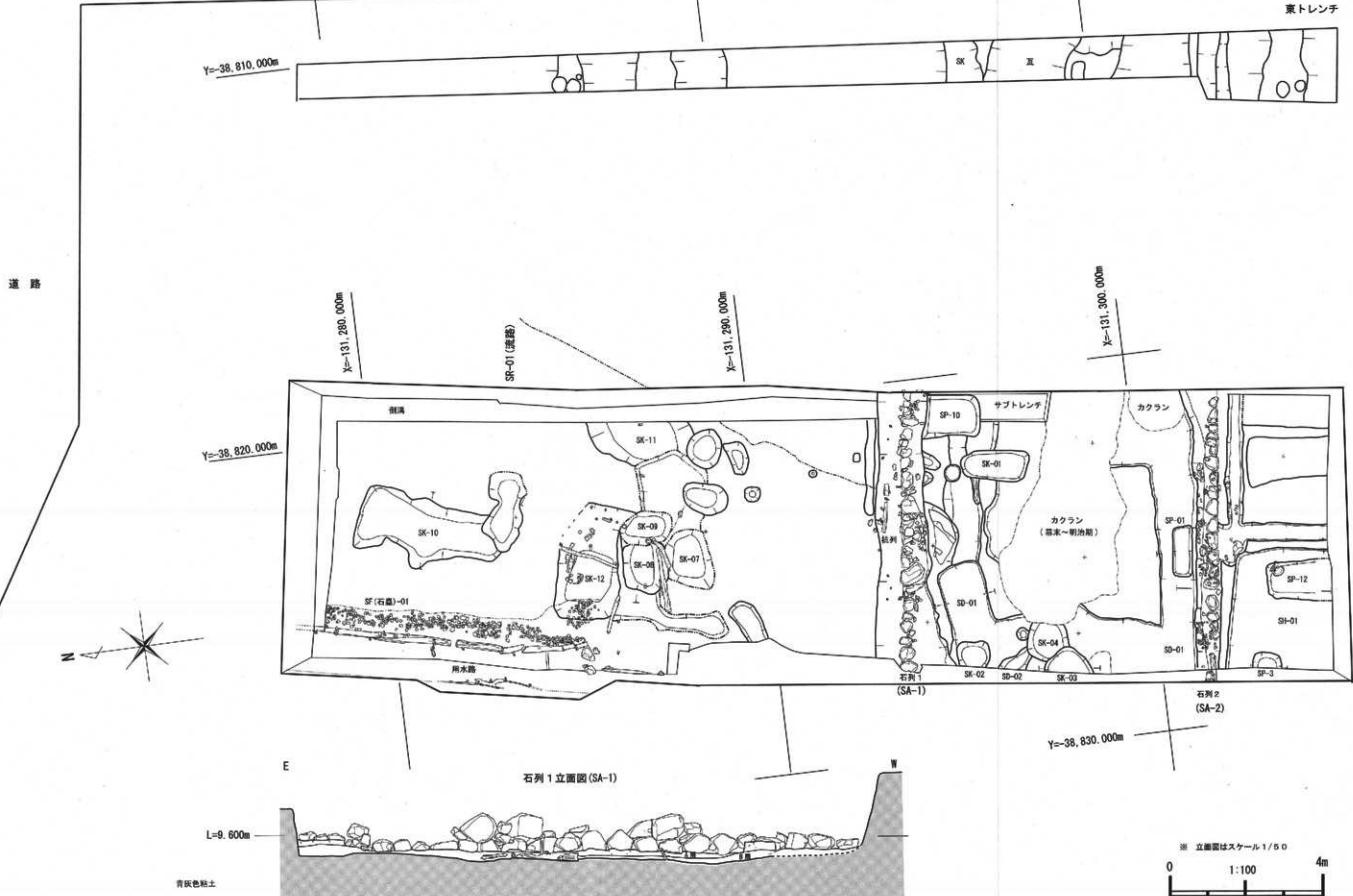
今回の調査では、遺構面が4面確認された。出土した遺物は遺物収納コンテナに換算して約70箱に及び、その種類と内訳は第4面からは土師器高杯・土師皿・瓦器椀、第3面からは流路内(SR-1)より建具(化粧板・造り戸3枚・簇欄間2点・明かり障子1点・柱材(角・丸・板材)・疊?)・瓦・陶磁器・鉄製鍼先等が出土している。第2面では竪穴・土坑から瓦・陶磁器(焰烙花器)・木簡1点・墨書き木製品1点(板状)・漆器碗等が出土している。第1面からは瓦・陶磁器・銅杓子・漆器碗・横櫛5点・小櫛1点・寛永通宝1点(他1枚)が出土している。

第1遺構面(江戸時代~17世紀末~18世紀代)

現地表面下約(GL)-0.8mで検出され、北半部は青灰色粘土が一面に広がる。検出された遺構は、南半部で建物の基礎、もしくは路面幅約8mの両側に石列を有する東西道路遺構(SA-1・2)、北西端ではやや東に傾きを持つ用水路(SF-1)、竪穴状遺構(SI-1)、土塙(SK-1~4・8・10~12)、柱穴状遺構(SP-3・10・12)、溝(SD-1・2)が検出された。SA-1・2の石列間の土層を観察すると、3~4層ほどに分層され、10~30cm大の角礫を主体にして砂利や粘土・瓦を入れて、地盤を路盤のように堅固になるよう工夫していた。石列の構造は一番下に1~2cm大のパラスを敷き詰め、丸太材を並べており、上に20~30cm大の楕円礫を敷設している。南側の石列(SA-2)は抜き取られたのか一段であったが、北側の石列(SA-1)は2段残存しており、2段目の石のほうが40~50cm大と大きめの石を使用している。丸太材付近から寛永通宝が出土したほかに陶磁器(18世紀前半肥前染付茶碗)・瓦等がある。用水路(SF-1)は、明治期~現代の用水路が今回検出された用水路の西約2mの所に位置しており、今回検出された用水路を踏襲したものと考えられる。全長は9.3m以上で、やや東にふれるも南北方向に伸び、高さ80cmほどの石壘を有する幅90cmの水路が検出されている。その構造は、水路の東壁面は丸太材や使用済み柱材を用いて杭を打って石壘を支えていたようである。対面の水路壁は薄い板材を用いて杭でとめていた。土塙(SK)は円形・楕円形・長方形・不定形があるが、いずれもゴミ捨て場的要素の強い遺構である。SK-3・4(平瓦47枚)は瓦類、SK-8から丸瓦・肥前染付茶碗、SK-10は銅杓子・焼塩壺・板材、SK-11は高台底部外面に「上」と書かれた赤漆器碗、SK-12は横櫛などの木工製品・漆器や焰烙・陶磁器・古錢(照平元宝?)、SI-1から18世紀前半頃の肥前染付茶碗等が出土している。また、長方形のSP-3・10・12も柱穴をしているが、ゴミ捨て坑の可能性が高い。

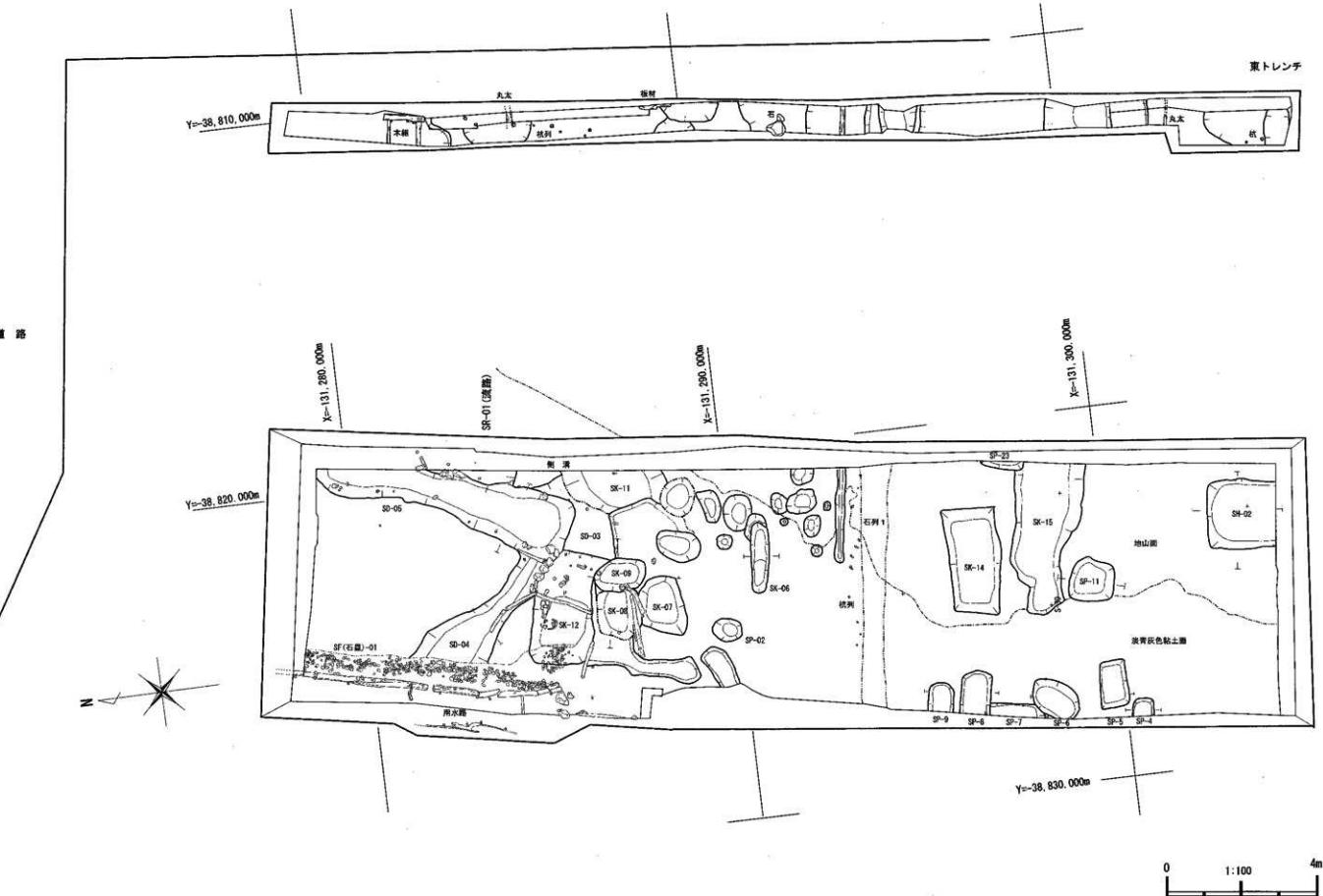
第2遺構面(江戸時代~17世紀中~後葉)

北半部が現地表面下約-1.2m、南半部が-1.0mで検出され、北半部および南半部西側は淡青灰色粘土面が一面に広がっており、南半部東側は明黄褐色土の地山面が広がる。検出された遺構



土層註記
 A: HC10195/1 棕褐色粘土 SL10198/6 黄褐色砂壤土 1~2mm大 15% 1cm大4 少-中 中-數 中-粗
 B: HC10194/1 棕灰色粘土 HC10197/1 明青灰色粘土 0.5mm大 5-10% 1~3mm大白色14 30-40% 1~5mm大4 30-40%

第28図 茨木遺跡(IK06-1) 第1面(17世紀末~18世紀代) 調査区全体図



第29図 茨木遺跡(IK06-1) 第2面(17世紀中～後葉) 調査区全体図

は竪穴状遺構（SH-2）、土塙（SK-5～7・9・14・15）、柱穴状遺構（SP-1・2・4～9・11・23）、溝（SD-3～5）が検出されている。南部では整地層面から一辺約2mの竪穴（SH-2）が検出され、丸瓦・平瓦・棟瓦・すり鉢・銅製品・肥前染付茶碗・皿・唐津徳利・漆器碗・曲げ物・木製品（建具一棟・組子）・箸等が出土している。各土塙からは、SK-5が平瓦・肥前染付茶碗（コンニャク印判17世紀後半～18世紀初）、SK-6から平瓦・丸瓦・木簡・多量の木材の部材、SK-7から平瓦・SK-9から平瓦・丸瓦・木材の部材が出土している。これら土塙は楕円・不整楕円形を呈し、ゴミ捨て塙と思われる。約1mの長方形の柱穴群は、SP-1が丸瓦・平瓦・磁器、SP-2が平瓦・木材・箸、SP-3が肥前染付、SP-4がすり鉢、SP-5が漆器・曲げ物・箸、SP-7が平瓦、SP-8が漆器碗、SP-11が丹波甕・木材が出土している。これら柱穴群は調査区南部で検出されているが、柱痕跡がないことから、第1面同様、ゴミ捨て塙の可能性が高い。

SD-4・5は調査区北半部に位置しており、SD-4は北西～南東方向に延び、北東部は用水路の石壠（SF-1）に切られ、南東部はSD-5と合流する。全長3.8m～、幅0.65～1.8m、深さ0.3mをはかる。SD-5は北北西～南南西に延び、全長7.0m～、幅0.9～1.6m、深さ0.38mをはかる。SD-4・5ともに壁際に20～40cm大の角礫や杭・丸太材を配置し、合流部では板材で壁をつくり水流調整可能な溝としていることから、耕作用の水路等としての機能を考えられる。SD-3からは平瓦・丸瓦・肥前染付・木簡・漆器碗・曲げ物・多量の木材、SD-4から平瓦・丸瓦・すり鉢・唐津甕・肥前染付（初期伊万里）・漆器碗・獸骨、SD-5から平瓦・丸瓦・肥前染付・板材・漆器碗が出土している。

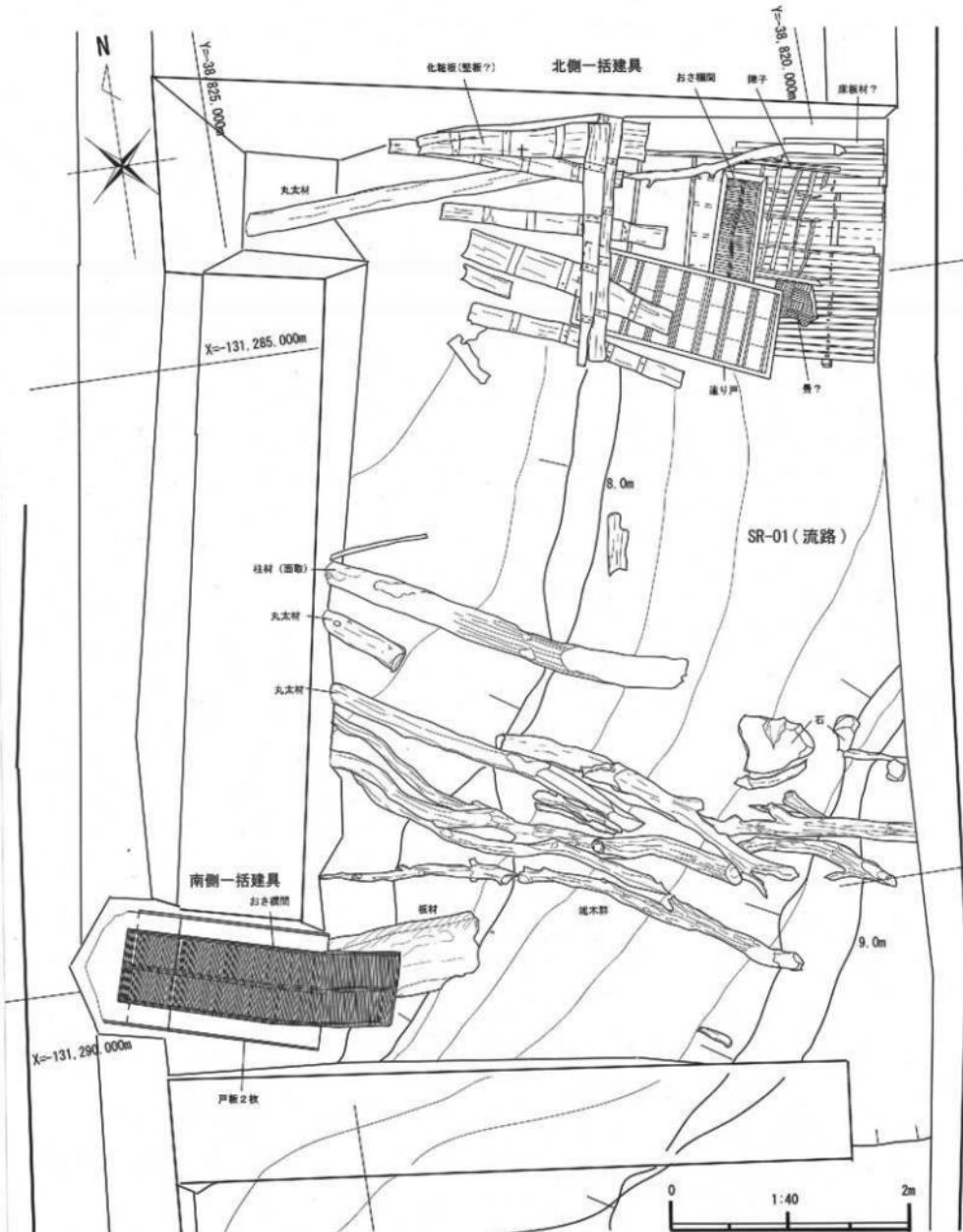
第3 遺構面（織豊期～江戸初期？）

調査区を北東～西方向にのびる流路（SR-1）が、調査区全体で検出されているが、北半部では第2遺構検出面で既にこの流路が確認されている。調査区の北半はほぼ全体が流路内におさまり、南半部では鎌倉～室町時代の遺構群を壊して西側をとおる。遺構検出面は北半部が現地表面下約（GL）-1.2m、南半部が（GL）-1.4mであるが、面的にはほぼ平坦で標高（T.P.）9.2mをはかる。流路（SR-1）の幅は8m以上におよび、東側の肩部分（遺構ライン）が確認され、長さは調査区全域に及ぶことから28m以上確認された。検出面から流路底面までの深さは、1.27～2.8mで標高（T.P.）6.5mである。流路（SR-1）の埋土は16層に細分され、①・③・⑤層は灰白色砂壤土を主体とし、黒褐色粘土を層状に含む。②層は褐灰色粘土を主体とし、明オリーブ灰色粘土を含む。④層は灰色粘土を主体とし、明青灰色粘土を含む。⑥～⑪層までは褐灰色粘土が主体で、⑥～⑧層は明緑灰色砂壤土や黒色シルトを含む。⑨～⑪層は褐灰色シルトや多量の明青灰色粘土ブロックを含むことから人為堆積層と推測される。⑫層は黒褐色粘土が主体で、多量の明青灰色粘土ブロックを含み、建具類が一括出土している。⑬層は暗オリーブ色粘土を主体とし、層状の黒色粘土を含み、木材が出土している。⑭層は明青灰色シルトを主体とし、オリーブ灰色粘土ブロックを含む。⑮層は暗オリーブ灰色粘土で、最下層の⑯層は黒褐色シルト質埴土主体で、多量の灰黄褐色砂壤土を含む。⑰層は地山で、1～5cm大の砂礫層を多量に含む明黄褐色砂壤土で流路底面は明青灰色の砂礫層である。

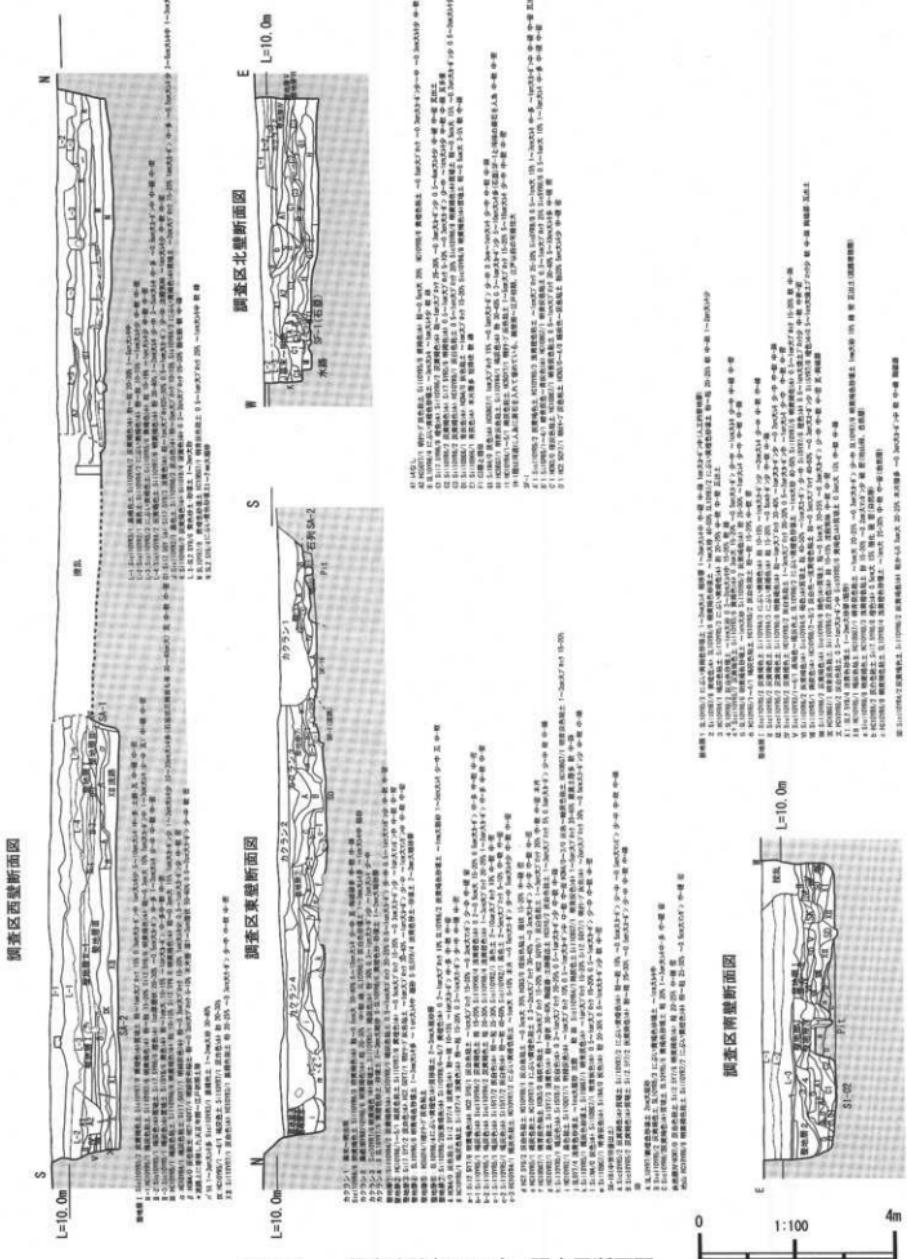
この流路（SR-1）の東斜面からはまとまって建具が出土しており、出土層位は⑫層で前後の堆積層をみると、1～5cm大の粘土ブロックであることから人為堆積と推測される。また、建



第30図 茨木遺跡(IK06-1) 第3面(16世紀~17世紀前葉) 調査区全体図・流路断面図



第31図 茨木遺跡(IK06-1) 第3面流路内建具出土状況図1



第32図 萩木遺跡(IK06-1) 調査区断面図

具の一括出土は2カ所で確認され、その出土状況は以下のとおりである。

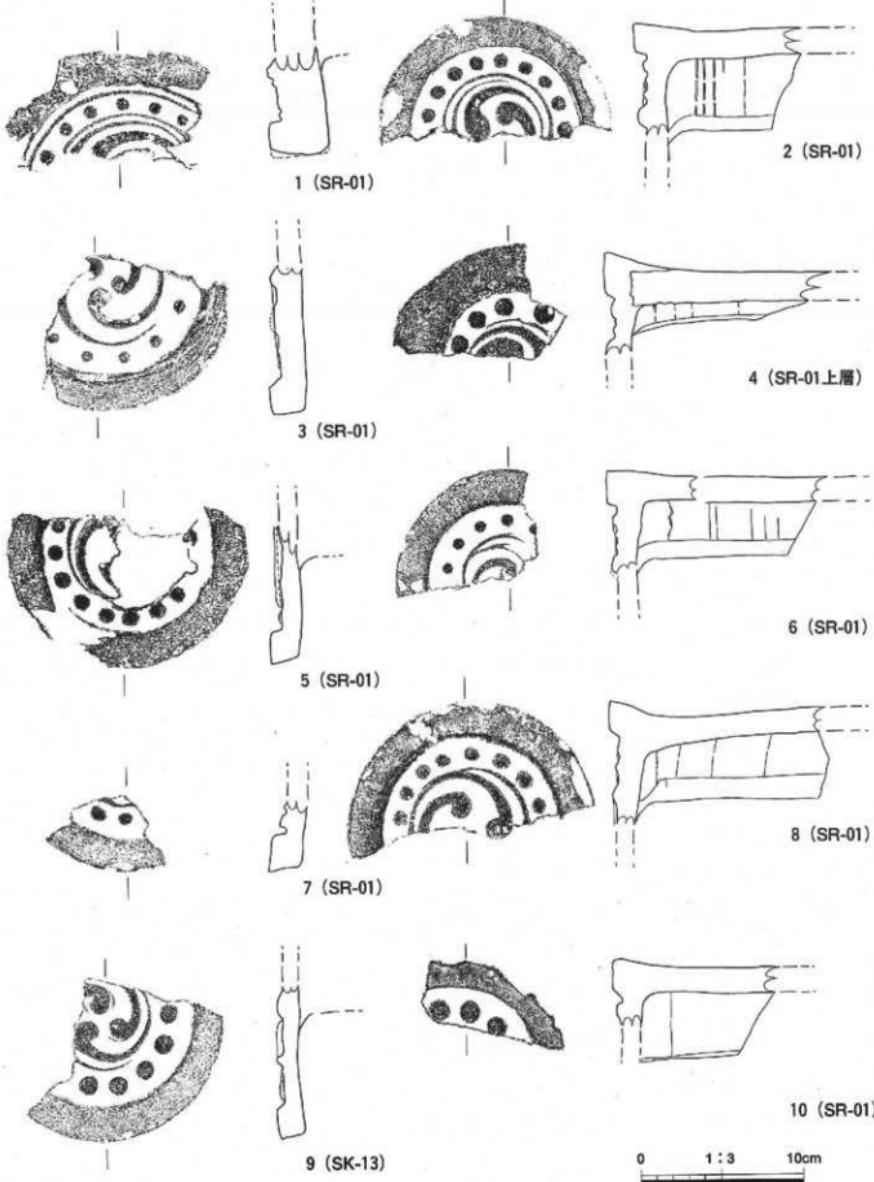
北側では様々な建具が重複しており、下から順を追っていくと、角材（柱）の上に短冊状の板材（床板材？）、その上に障子と編み物（畳？）、障子の上におさ欄間、欄間の上に遣り戸、遣り戸の上に薄い化粧板材（壁板？）というような状態であった。さらに各々は方向性を一にして整列しており、倒壊または、まるで置いたかのような出土状況である。（北側一括建具）化粧板（壁板？）は9枚出土し、長さ178～202cm・幅15～30cm・厚さ0.3～0.5cmでいずれも両端を何かに挟んだような圧痕が見られ、約40cm前後の間隔で釘を打ち付けた痕跡がある。遣り戸は長さ170cm・幅74cm・厚さ3cmをはかり、おさ欄間は長さ138cm・幅37cm・厚さ5cmで、おさは木製で間隔は約1cmをはかる。明かり障子は長さ168cm・幅95cm・厚さ3cm、板材（床板材？）は長さ170cm・幅190cm、1本あたりの幅5～6cm・長さ120～130cm・厚さ2cmで、表面は擦れて丸み・光沢がある。一部焼けた痕跡があり、板材は角材に釘打ちされる。角材はチョウナ仕上げである。角材（柱材）は長さ約180cm・幅約20cm・厚さ約20cm（チョウナ仕上げ。）、丸太材（柱材）は長さ260cm以上・直径18cmをはかる。また、南側で出土した建具（南側一括建具）はもっと人為的な出土状況である。出土した建具は、おさ欄間・戸板2枚・板材1枚であるが、おさ欄間に乗せるために戸板2枚と薄手の板材を重ねて、合計3枚で欄間に乗せている。また、欄間にはほとんど腐って原型をとどめていなかったが、ワラで出来た覆いを被せていることが確認でき、このおさ欄間を丁重に扱っていたことがうかがい知れる。おさ欄間は長さ230cm・幅60cm・厚さ1cmをはかり、おさは木製で、間隔は約5mmである。戸板2枚は長さ158cm・幅96cm・厚さ3cmをはかり、北側の遣り戸とは長さ・幅および横桟の数等が異なっている。板材は長さ130cm以上・幅60cm・厚さ1～2cmをはかる。建具以外の流路内（SR-1）出土遺物は、瓦（丸・平および瓦当）・陶器（青磁連弁文碗・唐津向付皿・備前甕・すり鉢）・鉄製角先鍬などが出土している。

第4 遺構面（古墳時代・鎌倉～室町時代）

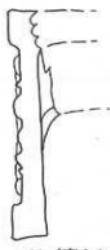
調査区南半部東側のみ確認でき、明黄褐色土の地山面で集落を構成する柱穴群や溝・土坑等を検出した。遺構検出面は標高9.2mをはかる。出土遺物は古墳時代中期の溝（SD-21）から土師器高杯の脚部が出土している。また、柱穴の大部分からは土師器皿や瓦器碗などが出土しており、SD-22からは土師器皿が30個体以上まとまって出土している。

出土遺物

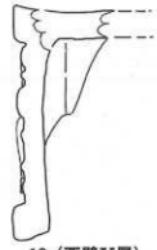
今回の調査で出土した遺物のうち、第3面流路（SR-1）の遺物を中心に掲載している。建具に関しては現在、洗浄・簡易な写真撮影を行った後、水槽に浸けて状態の保全に努めている。また、糖アルコールによる保存処理にむけて準備中であるため、実測図（原寸）、写真撮影（全体・部材毎）は同時に着手する予定であることから今回は掲載していない。また、掲載遺物は出土した丸瓦・平瓦・棟瓦の瓦当すべてを掲載し、掲載遺物の詳細は遺物観察表に記した。瓦当については、高槻城（高槻市教育委員会）の報告書を参考とさせていただいた。さらに、注目すべき遺物として刃先の丸い風呂鍬（丸先鍬）とは異なり、完形の鉄製角先鍬が出土したことは意義深いと思われる。



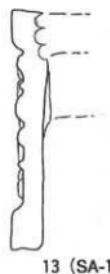
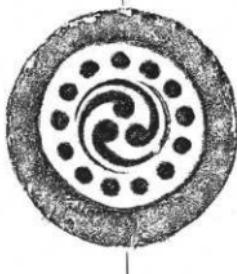
第33図 萩木遺跡(IK06-1) 出土遺物(1)



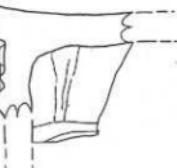
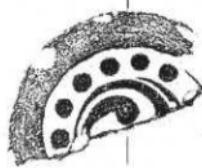
11 (東トレンチ)



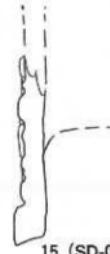
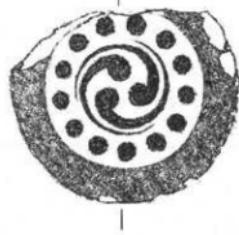
12 (西壁IV層)



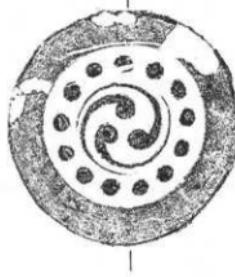
13 (SA-1)



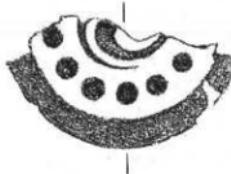
14 (第2検出面)



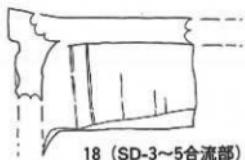
15 (SD-03)



16 (SD-03)



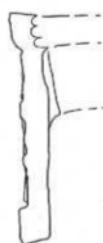
17 (SD-04)



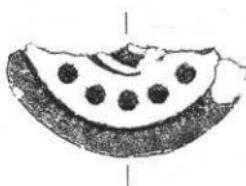
18 (SD-3～5合流部)

0 1 : 3 10cm

第34図 茨木遺跡(IK06-1) 出土遺物(2)



19 (SK-04)



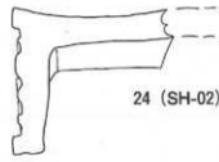
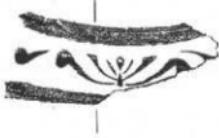
20 (SA-01)



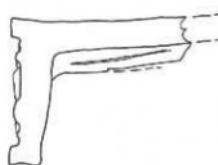
21 (第2検出面)



22 (SK-10)



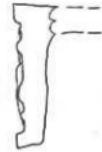
24 (SH-02)



23 (SH-02)



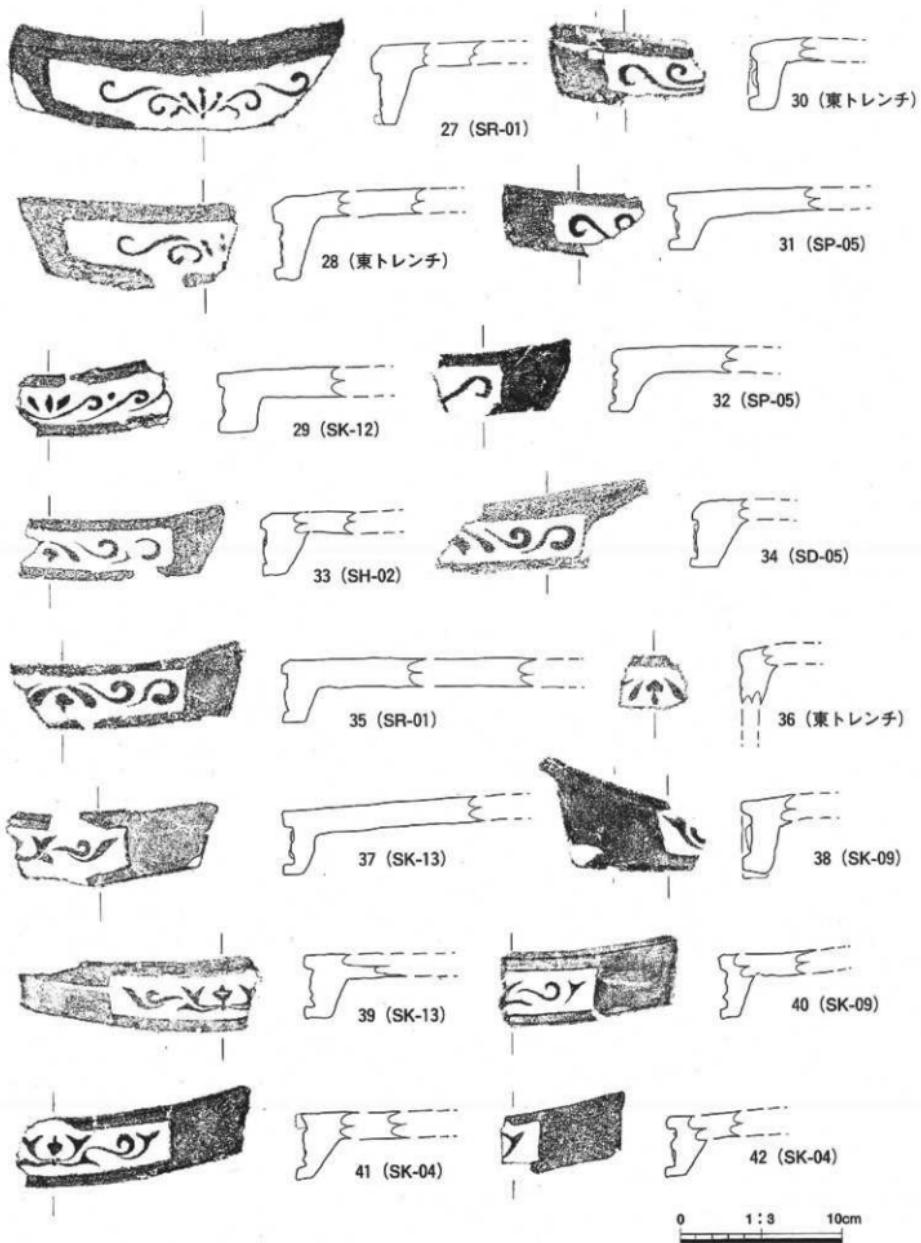
25 (SD-3~5合流部)



26 (SH-02)



第35図 萩木遺跡(IK06-1) 出土遺物(3)



第36図 茨木遺跡(IK06-1) 出土遺物(4)